

第 1 回世田谷区総合教育会議

日：令和 7 年 8 月 30 日（土）

場所：世田谷区立教育総合センター

午後 1 時30分開会

○司会 それでは、定刻になりましたので、令和 7 年度第 1 回世田谷区総合教育会議を開催いたします。

私は、本日の進行をさせていただきます世田谷区政策経営部政策企画課長の小泉でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

開催に当たりまして、本日の会議の流れについて御説明申し上げます。本日は 2 部構成でございます。

第 1 部といたしまして、基調講演と、区や他自治体での取組事例の紹介を行います。基調講演では、文部科学省学びの多様化学校マイスターをはじめ、多方面で御活躍されております黒沢正明様に御講演いただきます。その後、区職員による「学びの多様化学校の教育課程について」、「鎌倉市立由比ガ浜中学校（学びの多様化学校）での取組み内容について」を御紹介いたします。その後、休憩を挟みまして、区長と教育委員会による意見交換を行います。第 2 部での意見交換でございますが、第 1 部におけます基調講演、また、取組事例の発表、意見交換を踏まえまして、区長、教育委員会、また、第 1 部で御講演いただきました皆様方にもゲストとして加わっていただきまして、議論を行う予定でございます。

御来場の皆様には、第 1 部の終了後の休憩の際に御質問をお寄せいただければと存じます。会場にお越しの方は入り口でお渡しいたしました質問票に、また、オンラインでの御参加の方も多数いらっしゃるというふうに伺っておりますが、Z o o m の Q & A 機能におきまして御質問をお寄せいただければと思います。第 2 部の中で幾つか御紹介しながら議論を進めてまいります。

それでは、開催に先立ちまして、まず、保坂区長より御挨拶をいただきたいと存じます。それでは、区長、よろしくお願いいたします。

○保坂区長 皆さん、こんにちは。世田谷区長の保坂展人です。この総合教育会議は毎年定期的で開催しておりますけれども、今日は、お集まりいただきました傍聴の方も、また、オンラインで御覧になっている方も、これは長時間になりますが、大変大事なお話を積み上げていきたいと思っております。

本日は、「子どもに魅力ある学校づくりの取組み」ということなのですが、実は、世田谷区では既にねいろという学びの多様化学校の分教室という形で、前の教育センターの建物を活用して既にスタートしています。今度は北沢小学校跡地ですね。これまで池之上小学

校の建て替えで仮校舎として使ってきましたけれども、今ちょうど改修工事をしていまして、来年の4月から北沢学園中学校という形でスタートします。また同時に、そこにはほんとにスクールも入り、また、きたっこという児童館の分室も入ってくるといった内容でございます。

7月19日、ちょうどこの会場を全部フラットにしまして、世田谷区教育委員会による学びの多様化学校の説明会がございました。私もどのような関心、また、御意見、御質問が出るのかということも大変気になったので、一番後ろのほうで傍聴させていただいたんですが、当初、私が入ってきた定刻の頃も七、八十人になっていて、始まってからも続々と保護者の方が入ってきて、多分100人を大きく超える、椅子が足りなくなるくらいの熱気で、本当に真剣に皆さん、保護者の方は教育委員会の説明に耳を傾けていただき、また、質問もねいろと北沢学園について出していただきました。そのぐらいこのところ、新型コロナの流行後、1500人、1600人、1700人、今少し戻して1500人ぐらいの学校になかなか通えない、通わない不登校のお子さんたちが増えていると。どこで学び育ち、そして成長の場をつくるか。それは大変大きな関心が当然保護者の方にも、世田谷区の責任としても大きなテーマだなというふうに思っているところです。

本日は、第1部で、いわばその先駆例として、不登校特例校と言われてきた、学びの多様化学校の先駆けとして行われてきた八王子市の高尾山学園で学校長を務められて、現在は文科省の学びの多様化学校マイスターを、また、豊島区不登校対策スーパーバイザーもされている黒沢正明さんによる御講演をいただきたいというふうに思っております。その後、世田谷区教育委員会職員による他の地域の取組事例の紹介を行います。そして、第2部では、教育長をはじめ、教育委員、そして私も入らせていただき、講師の黒沢先生も含めて学びの多様化学校に関わる議論を深められたらと思っております。限られた時間、少し長くなりますけれども、どうかよろしく願いいたします。以上です。（拍手）

○司会 保坂区長、ありがとうございました。

この総合教育会議は、地方公共団体の長及び教育委員会で構成されている会議でございます。本日、会議に参加されております世田谷区教育委員会の委員の皆様方を御紹介させていただきます。

まず、知久教育長でございます。

続きまして、委員を御紹介させていただきます。

澁澤委員でございます。澁澤委員は、現在、NPO法人理事長を務められており、各地

で地域づくりを進められております。また、次世代を担う青少年の育成や環境啓発活動に携わるなど、様々な分野で御活躍をされております。

続きまして、中村委員でございます。中村委員は、東京都公立中学校教諭、世田谷区立中学校副校長、世田谷区立中学校校長などを歴任しまして、校長会会長に就任されるなど、東京都の教育の現場の第一線で活躍をされておりました。

続きまして、鈴木委員でございます。鈴木委員は、世田谷区立小学校PTA連合協議会会長や東京都小学校PTA連合協議会副会長、また、区立小学校の学校支援コーディネーター等を務められておりました。

続きまして、坂倉委員でございます。坂倉委員は、これまで慶應義塾大学のグローバルセキュリティ研究所特任講師や世田谷区社会教育委員などを歴任され、現在は東京都市大学都市生活学部教授を務められるなど、教育行政の発展向上に御貢献いただいております。

委員の皆様方、本日はどうぞよろしくお願いいたします。

それでは、第1部の基調講演に入ってまいります。先ほど区長から冒頭の御挨拶でも御紹介がございましたが、今回は黒沢正明様をお迎えいたしまして、「世田谷区学びの多様化学校に期待すること～高尾山学園での実践より～」と題しまして御講演いただきます。経歴につきましては、先ほど区長からもいろいろ御紹介いただきましたが、現在、文部科学省の学びの多様化学校マイスターなどを務められております。

それでは、黒沢様、御講演のほどどうぞよろしくお願いいたします。

○黒沢氏 皆さん、こんにちは。ただいま御紹介いただきました黒沢と言います。今日はどうぞよろしくお願いいたします。また、今日はこういう場にお招きいただきまして、本当にありがとうございます。私の拙い説明ですけれども、基調講演ということで少しお話をさせていただきますと思います。

子どもにとって学校はどんな場所でしょうかと問われたときに、いろんな答えがあると思います。コロナ禍で学校が全面的に休校になったときに、改めて我々は学校という場所は立派な社会インフラなんだということを認識したんじゃないかなと思います。そんな中で子どもたちは一生懸命学校に通っているわけですが、私は少なくともこの4つは子どもにとって必要なことじゃないかなと思っています。安全で楽しい場所であること、頼れる先生がいること、仲間や友人がいて、それで自らが成長、あるいは自己肯定感を高められる、こういう場所である必要はあるなと僕は感じています。不登校になっちゃった子どもたちは、何らかの理由でこの4つから外れている子という認識で私はいます。

何で不登校対策をしなきゃいけないんだと。いろんなところで不登校が増えているから
だ何だというのはありますけれども、僕はここに尽きるかなと思います。不登校が長引く
と、ほぼほぼ将来、ひきこもりの大人になります。全員じゃないですけども、なる可能
性が非常に高い。ひきこもりの大人になると、どうしても働くということができませんの
で、成人しても直接税、所得税を納めない大人になってしまう。そういう大人が生活する
には生活保護を受けるなど、いろいろな意味で社会負担が増えてくる。

今現在、15歳から64歳までの働ける世代のひきこもりは146万人と言われております。こ
の人たちの生涯年収は全部合わせると380兆円という試算もあります。そこから導き出さ
れる税収は4.4兆円になるわけですけども、言い換えると、この4.4兆円が不登校をきっ
かけに、ひきこもりの大人によって損失しているというふうに考えることもできます。

よく福祉の中で50－80問題というのが少し前に取り沙汰されましたけれども、これはこ
のまま年齢を取って今は60－90問題みたいな形になっています。さらに、3世代にわたっ
て30－60－90、90歳の親が60の子どもと30の孫を扶養する、あるいは育てる、こんな状態
になってしまっていることもよく耳にします。このままでは日本の国力が落ちるばかりで
はなく、継続的に日本が発展していくことはできないんじゃないかなというふうに感じ
るところだと思います。そういう意味では、不登校対策というのは喫緊の課題じゃないかな
というふうに考えるところです。

その学びの多様化学校ですけども、全国に今現在58校あります。文科省は、C O C O
L Oプランといって目標を300校に設定して全国に設置を進めていこうということでやっ
ているんですけども、実はなかなか進んでいないんですね。だからこそ私のようなマイ
スター、5名任命されていますけれども、このマイスターがいろんな自治体に伺って設置
促進という活動をしているわけです。東京都は突出して設置が進んでいます。全体で今14
校あるはずです。本校型と言われるいわゆるフルスペックの学校施設がある多様化学校と
いうのは東京都は1校だけです。これは高尾山学園になるわけですけども、全国的に見
てもフルスペックの学校型の学びの多様化学校は実は少ないんですね。東京都の中もほと
んどが分教室型、ねいろも多分分教室型だと思うんですけども、これから北沢学園がで
きるということで、学校型が都内に1校増えるんじゃないかなと思って、僕は非常に期待
しているところです。

あわせて、東京都はチャレンジクラスという仕組みも今調査、研究をしております、
学校の中に校内分教室という形で多様化学校を設置するような取組なんですけれども、こ

れも今現在、数が進んできて、東京都は不登校対策に今一生懸命力を入れているところじゃないかなと思います。

では、多様化学校はどんな学校なんですかと言われたら、基本的には通常の学校と同じです。違いは時数軽減。年間千何十時間授業をやるわけですが、これを1割あるいは2割程度カットしていく。教育課程を比較的柔軟に組めるということで、高尾山学園なんかではいろんな体験ができる体験型の時間をたくさん授業として取り入れているなんていうことをしていますが、教員の配置定数ですとか、あるいは教員の異動事務等は地域の学校と全く同じ条件でやっていますので、人を確保するというのはなかなか難しいところはあるんですけども、それでも子どもたちのために不登校を何とかという教員が集まって一生懸命運営しているところではないかなと思っております。

高尾山学園の大きな特徴は、先駆けで今から23年前に当時の市長がつくろうと言ってつくった学校なんですけれども、大きな違いは校内に八王子市教育委員会の分室が設置されていたり、その分室がオペレーションするところの適応指導教室も中に入っているというところが大きな特徴かなと思います。私も世田谷区さんの策定委員会に委員としてお招きいただいていたので、いろいろ高尾山学園の事例をお示しさせていただいたところもありますので、今後、世田谷区さんも何らかの参考にしていただけるんじゃないかなというふうに考えているところです。

では、不登校とは、学校に行けない状態なわけなんですけれども、私は500人ぐらい卒業生を見送ってきました。いろんな子どもたちを見てきて共通して言えるのは、子どもは“ない”状態、大人は“たい”状態なんです。“ない”状態とは何かと言ったら、ここに書いてありますけれども、友達がいない、大人を信用できない、学習に向かない、やってもできない、心が安定しない、家が落ち着かない、こんなところでないない状態になるわけです。大人は逆なんですね。“たい”状態。特に教員は、やはり自分の理想の子ども像を持っています。なので、やっぱり教員として、この子はここを伸ばしてあげたい、ここはもっとこれができるようにしてあげたい、ここが苦手だから苦手なところはうまくできるようにしてあげたい。子どもに対していろいろやってあげたい、教えたい、こういう思いが非常に強いわけなんですけれども、これを強要していくと、子どもたちもなかなかつらくなるんじゃないかな。大人のそういう話を受けて、よし、頑張るぞと言って頑張れる子どもはすごく伸びます。でも、それがなかなかつらいという子も現実にはいるんじゃないかなと思います。

これは親御さんにも言えるんですね。自分の子どもは将来こういう職業に就かせたい、

将来はこんなふうなスポーツ選手になってほしい、大谷選手のようなスポーツ選手になってほしいな。塾があったり、いろんな習い事をしたり、いろんなクラブチームに入れたりとか、いろいろやるわけですがけれども、それで頑張れる子は伸びます。でも、頑張れない子はどうでしょう。なかなかつらいんじゃないかなと思います。

よくこういうお話の場で私がさせていただくのが、子どもの頃にやっていたテレビ番組の一つで「巨人の星」というのがありまして、お父さんの星一徹が、息子の星飛雄馬を右利きから強制的に左利きに変え、与えるおもちゃはボールのみ、大リーグボール養成ギブスなるものをつけさせて、徹底的に鍛え抜くわけですね。見事、本人は巨人軍のピッチャーになるわけですがけれども、これを今やったらどうでしょうね。立派な虐待ですし、やっぱりそれくらいやらないと駄目なんじゃないかということではなくて、そういうことをやってしまうと子どもがどれだけ傷つくかということのはすごく心配するところです。そういうものもありますけれども、いずれにしても、大人が希望することを強制していくという姿が今の世の中にはマッチしないんじゃないかなというふうに考えるところです。結果、子どもにとって学校も家もつらい場所になってしまっているんじゃないかなと考えます。

子どもの成長過程と書いてありますけれども、いわゆる通常級でもそうですし、多様化学校もそうなんですけれども、最終的な義務教育のゴールというのは自己理解と卒業後の進路選択だと思っています。自分のことをよく理解して、その上で自分はこういうふうに進みたい、こういう大人になりたい、こうやって学校を選択して高校に進学していくと思うんですけれども、これは多様化学校でも基本的には同じです。ただ、多様化学校に来ている子は不登校になっちゃっている子なので、この「授業／行事に出る」というところよりも下、この三角形のピラミッドの下のほうです。まず学校に興味、関心を持ってもらわなければいけない。それから、たとえ一歩でも家から出られるようにならなければいけない。何とか学校に来たら、最低限居場所は使える。それから人と関わる。人と関われたから授業に出る。授業に復帰していく、授業に出ていくまでに幾つものハードルがあるわけで、ここをしっかりと支援できるのが学びの多様化学校じゃないかなというふうに考えます。これを過ぎて、通常校と同じように卒業後の進路選択まで持っていくのが多様化学校であるわけで、決して居場所として学校をつくとか、居場所として運営していくということではなく、最終ゴールは通常校と同じというふうに考えております。

では、ちらっと八王子市立高尾山学園のことを御紹介したいなと思います。

まず、今から23年前に当時の八王子市長が、八王子は不登校が多いな、何とかしようぜ

ということで、市長のトップダウンでつくった学校です。当時は東京都教育委員会も文部科学省も設置には反対の立場だったので、当時、八王子の事務局方は知恵を絞って、小泉構造改革特区の教育特区の仕組みを使って総務省管轄でつくっています。2年間の研究期間を経て、高尾山学園のような教育課程を組むと不登校の子どもたちに有効である、有益であるという結論が出まして、そこで文部科学省さんも重い腰を動かして法改正になり、今の学びの多様化学校の仕組みができたというふうに聞いております。一貫して当時から20年以上貫いているのは基礎学力と社会性の獲得なんですけれども、僕自身はまず、先ほども言いましたように、たとえ一歩でもいいから家から出ようよ、人との関わりを持とうよ、そして学力。学校というと、どうしても第1位に勉強する場所、学力ということになりがちですけれども、それは決して諦めているわけではなくて、学力よりも前に人間関係を大切にする。そんな学校として20何年間も運営してきているというところがあります。

ちなみに、八王子でも別室指導ですとか、保健室登校なんていうのはずっとやってきていますので、軽い不登校の子は高尾山学園には来ません。どっちかという、もう万策尽きた、環境を変えざるを得ない、何とかしたい、こういう子たちが来るので、風邪で言うと、こじらせた状態で学校へ来ます。そのこじらせた状態の子どもたちを何とか先ほどのピラミッドの形のように底辺から一生懸命持ち上げて、最終的に卒業に持っていくというところは高尾山学園で一番苦勞しているところになります。

いろいろなことをやっていますけれども、説明すると切りがないので、ちらっとだけお話ししたいと思います。学校に来てもらうためにいろんな登校刺激を子どもたちにつくっていかなくちゃいけないんですけれども、そのキーワードは、「楽しい・嬉しい・美味しい」。これに、学校ですから安全で安心だよ、知的好奇心、学んで楽しいな、こういうことを子どもたちにどう訴求するかということになります。この「楽しい・嬉しい・美味しい」というキーワードは、実は福祉の中では普通に使っている言葉で、ひきこもりの大人を家から引っ張り出すキーワードと言われているんですね。「美味しい」という部分は非常に大切かなと思って、高尾山学園でも「美味しい」を結構取り入れてやっております。

では、何がどう違うんだとか、どこがポイントですかというときには、真ん中に書いてありますように、授業中に居場所を使うことができる。休み時間に使うことができる。授業中のみ使うことができる。プレイルーム、相談室、保健室、大人がいる場所については、授業中いつでも「先生、行ってきます」と言えば利用できます。基本は学習をするということに基づいておりますけれども、今日は調子が悪いぞとか、さっき授業を頑張り過

ぎちゃった、今日は誰々ちゃんとちょっと仲がよくない、心が不安定、そういうときには無理強いして授業に出るということではなくて、居場所を利用する。居場所で力をためてから授業に復帰する。こんなことを子どもたちに自己選択させております。先生方もそうですし、いろんな方が見に来て、子どもたちは伸び伸びとやっていますねと言いますけれども、やっぱり遊びの中で子どもたちはいろんなものを学びますし、遊びの中で人間関係もできていくかなと思います。

先生方はこの逆ですね。授業を分かる授業、楽しい授業にしていかないと、先生の授業はつまらないと言ってプレイルームに行っちゃうんですね。なので、先生方は恐々として頑張ってくれています。

皆さんはどうでしょうか。例えば高校・大学時代に授業がつまらない講義だと思ったときはどうされていましたか。僕らのときは睡眠学習とか、内職とか、ふけるなんていうのをやっていましたけれども、同じことを小学校、中学校でやったら烈火のごとく怒られますよね。何で大学生は怒られないかといったら自己選択なんです。自分の責任で授業に出る、自分の責任で学ぶ、教授は怒らない。でも、小学校、中学校は違うんですね。学びなさい、学ばねばならない、こうなっているわけ。ここに高尾山学園は、開校当時から選択の自由、自己責任ということで運営しております。

では、学びの多様化学校でのK F Sということになりますが、どういうポイントで運営していったらいいんだろうなというところなんですけれども、多様化学校に求められるものは、まず頼れる先生になってほしいなと思います。あの先生は信じられない、もう嫌だと言って高尾山学園に来ている子は結構いました。そうじゃなくて、北沢学園は楽しい、すごいな、そういう頼れる先生になってほしい。その頼れる先生になるときのポイントは、“ねばならない”からの脱却です。先ほど“たい”状態と言いましたけれども、やっぱりどうしても教員は、こうしなければならないとか、これをやらなければならない。9月1日に授業が始まると思うんですけれども、宿題はやってこななければならない、必ず1日に提出しなければならない、こういう考えの先生はいまだに結構いたりするんですけれども、この“ねばならない”からちょっと一歩下がって子どもたちに寄り添う指導をしたら随分変わるんじゃないかなと思います。ここにも書いてありますけれども、教員の常識にとらわれ過ぎていないか、自らの思いを強要していないか、相手の思い、子どもの思いをちゃんと理解できているか、他者から見て教師が子どもに対して強者、弱者の関係になっていないか、そもそも分かる授業、楽しい授業ができていますか、こんなところが言いたいと

ころになります。

頼れる学校になるには、あの学校は信じられないじゃなくて、この学校だったというふうにしていかなければいけないわけですが、そのためにはいろんなことがあります。先生方一人一人の能力を伸ばす、管理職と連携しながら学校を伸ばしていくというのはもちろんですが、僕が大切なのは情報共有だと思います。とにかく子どもの情報というのは担任が持っています。隣の担任は隣の生徒のことはよく知らない、学年の中で情報共有はするけれども、学年を超えたら分からない、ましてや管理職まで声が届いていないなんていうことはよくあります。そうではなくて、学校全体で常に情報共有をしていく。特に北沢学園あたりはそんなに人数はいないと思いますので、補助員に至るまで全職員が情報共有をしっかりできるといいんじゃないかなと思います。誰に聞いても同じ対応をしてくれる、誰に聞いても相談に乗ってくれる、誰に聞いても優しく接してくれる。その裏には教員、職員がしっかり情報共有をしていくことが重要じゃないかなと思います。子どもや家庭の状況をちゃんと把握していますか、担任一人で抱えていませんか、その情報はアップデートできていますか、アンテナ高く行動できていますか。

昨日も豊島区で講演をやったんですけれども、その中で、不登校というのは信号機で言うところの赤信号なんですね。赤の状態。でも、不登校を未然に防止するといったら黄色信号を拾っていかなくちゃいけないわけですね。黄色信号は何かといったら、教員がしっかりアンテナを高くして子どもたちの様子を見ている。休み始めてからでは遅い。休む前に何かしていく。これは必要じゃないかなというふうに私自身は考えています。

学校ばかりに任せるんじゃないで、やっぱり行政ですとか、あるいは管理職がやることも必要かなと思っています。先生方に少しでも余裕をつくる、これは管理職の責任かなと思っています。特に効率よく仕事をやっていくということも大切ですし、思い切った断捨離も学校の中では必要じゃないかなと思っています。重要なことにたっぷり時間をかけて、そうじゃないことに時間を余計に使わないことが大切だと思います。それから、関われる大人を多くする。学校というと、どうしても教員だけで何とかしようという文化がありますけれども、やっぱりそこにいろんな補助員だとか、サポーターだとか、今、学校は心理職もいますし、区によってはスクールソーシャルワーカーみたいな福祉職も学校に配置したりしていますけれども、こういう人たちをなるべく多くして、子どもたちと関われる大人を多くしていく。先生には相談できないけれども、カウンセラーさんには相談できる、先生には相談できないけれども、サポーターだったら気軽に話ができる、こういう環境を

ぜひつくっていく必要があるんじゃないかなと思います。

あとは、不登校に特化した、あるいは不登校に慣れた職員は世の中にあまりいないですね。この人いいなとか、この人できるなという人は、ぜひ離さないようにしていくのがいいんじゃないかなというふうに思います。

複層的な支援体制ということで、最近の不登校対策の流れは複層的な支援というふうになっています。文科省が言う学びの多様化学校というのは不登校対策の切り札なんですけれども、この切り札だけの一本足打法ではなくて、学校そのもので不登校を出さない。黄色信号がともったら、校内 S S R——校内別室ですね——を使う。それでも駄目な赤信号になった子は多様化学校を使う、フリースクールを使う、あるいはバーチャルラーニングプラットフォームみたいなものを使う、適応指導教室もあるかもしれません。そういう外部の力を借りるということになるんですけれども、基本的に出さないためにこういう複層的な体制を整え、どこの段階でもちゃんと子どもたちを拾ってあげられるんだという支援をしていくことが僕は重要じゃないかなと思っています。

ということで、北沢学園中学校に期待することということなんですけれども、不登校ゼロに向けてということで、ゼロにしないというのはなかなか難しいと思います。いろんな子がいます。学校が理由で不登校になった子もいれば、家庭が難しくてというのもあるかもしれません。なので、なかなかゼロにはならないんだけど、ゼロに向けてどうしようか、そこが大切じゃないかな。北沢学園が世田谷区の不登校対策の起爆剤になってほしいなというふうに思っています。

まずは適切な K P I を設定して学園の成果の見える化をしっかりとやってほしいなと思います。キーパフォーマンスを何に設定するか、登校率にするのか、出席率にするのか、あるいは授業参加率にするのか、高校の進学率にするのか、いろんな指標があるかなと思います。これをしっかり議論していただいて K P I を設定して、北沢学園はこれだけ成果が出ていますというのが見えるようにして行ってほしいなと思います。

それから、2つ目が研修制度です。先ほど言いましたように、不登校に特化した教員は世の中に基本的にいないです。新採で入ってくる教員もベテランの教員も不登校の子はあまり相手にしたことはないんですね。もちろん、自分の担任だった子が不登校になっちゃったという体験はあると思うんですけれども、その子に特化した教育だとか、その子に特化した寄り添いというのはなかなかできていないのが実情です。なので、せっかく北沢学園ができますから、ここを研修の拠点として、ここに悉皆で区内の先生方が研修に来る、

いろいろなことを学んで自校にフィードバックしていく。僕も12年間校長をやる中で、いろんなところから講演を依頼されたり、いろんな学校の視察を受けてきましたけれども、座学だと伝わらないです。幾らこんなことをやっているんですよとか、こういう取組なんですよと言っても、やっぱり研修に来た先生方は、ふうん、なるほどね、頑張っているね、自分たちは自分たち、こうなるケースが多いんですけれども、やはり自ら実地研修みたいな形で研修制度をつくっておくと、じわりと効いてくるんじゃないかなと思います。

それから、ねいろもまだしばらく存続するというのも聞いています。通常校ももちろんあると思うんですけれども、そこと連携した新たな拠点づくりというのは必要じゃないかなと思います。ワンストップでいろんな機能を北沢学園の中に集約して、ここに行けばとにかく不登校にしっかり対応してくれるというのももちろんですし、地域の学校もここに来ていろいろ学んでいく、あるいは交流していくというのも必要じゃないかなと思います。

僕の持論は、「大人が楽しいと思っている学校は子どもたちも楽しいはず」です。眉間にしわを寄せてきりきりししながらやっている先生方を子どもたちは信用するでしょうか。そうじゃなくて、大人も楽しむ学校になっていってほしいなというふうに思います。ぜひ教員のやる気を引き出すやる気エンジンづくりをしていってほしいなと思います。

あと、リクエストでありました子ども目線で期待することも少し話をしてくださいということなので、1枚作りました。子ども目線で考えたときは、冒頭にお見せしました、安全で楽しい、頼れる先生がいる、仲間や友人がいる、成長と自己肯定感、このことに尽きるんですね。北沢学園へ行ったらこれがちゃんと体験できる、実際にそれを味わうことができる、そういう学校だと子どもたちは、いいな、行きたいなというふうになりますし、卒業した後、自分の学校を自慢すると思います。多様化学校に来た子たちは、意外と多様化学校を卒業したということを秘密にしたがるんですね。自分は不登校だと。あまり世の中で堂々と言えない。どこどこ学校を出たなんていうのは言えない。こういう子は結構多い。高尾山学園もそういう子がいます。でも、逆に自信を取り戻した子、本当に頑張った子は堂々と言います。僕は高尾山学園にいました、不登校だったけれども、今はこれだけ頑張れています、高尾山学園ありがとう、こういうふうになるわけですから、そういう卒業生が出ていくような学校になっていくとよりいいんじゃないかなと思います。全てみんな不登校を経験した子たちが集まる学校ですから、ある意味、みんなイコールコンディションで来ているわけですね。その中でお互いを信頼し合い、お互いに学び、楽しく学校生活を過ごし、高校に向けて卒業していく、こういういい循環ができる学校である必要

があるかなと思います。

いろいろ書いてありますけれども、最後はやる気エンジンとやる気スイッチじゃないかなと思います。子どもたちにやる気スイッチを入れようとか、やる気スイッチをとテレビのコマーシャルなんかでもよく聞くとおもいますけれども、やる気スイッチの前に、不登校の子たちはやる気エンジンがないんですね。エンジンがないものにスイッチを入れても回るわけがないんです。では、やる気エンジンをつくってあげなきゃいけない。やる気エンジンとは何かといたら、将来への希望、自分のやりたいこと、なりたいことを見つけることだと思います。自分のやりたいことがはっきりしてくれば、やっぱりそれに向けてすごく努力します。野球の選手もそうですし、プロスポーツの選手もそうですけれども、自分はこれをやりたいと言ってとことん突き詰めてアスリートになっていくわけですから、それと同じように自分のやりたいこと、漫画家がいいんだ、いや、こういうことをやりたいんだ、そういうことを見つけてあげられる学校にしていってほしいなと思います。とにかく9教科を学んだだけだとなかなかやる気エンジンはつくれないんですけれども、それ以外のいろんな体験型の授業、あるいは校外学習を含めた行事等、そういう中でやる気エンジンを見つける、そしてやる気スイッチを入れていく、そんないい環境、あるいは学校になっていくことを期待しております。

私からは以上で終わりにしたいと思います。御清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会 黒沢様、御講演ありがとうございました。

世田谷区では来年の4月に北沢学園中学校開校ということで今準備をしております、先生からも期待することということでエールをいただき、また、いろいろ視点を御示唆いただいたと思いますので、区のほうとしてもいろいろ考えるきっかけになるかなというふうに受け止めさせていただきました。また、子ども目線で期待することということで幾つかお話もいただきましたし、親の立場、子どもの目線ということでいろいろな御自身の御経験からの御講演をいただいたと思っております。ありがとうございました。

では、続きまして、今度は区のほうの取組ということで2つほどの事例紹介に入りたいと思います。

まず1つ目でございますが、「学びの多様化学校の教育課程について」ということで、区の教育委員会事務局教育相談課の森本指導主事から御講演をいただきたいと思います。

では、よろしく願いをいたします。

○森本指導主事 皆さん、こんにちは。世田谷区教育委員会教育相談課指導主事の森本と

申します。私から学びの多様化学校について御説明をさせていただきます。

まず最初に、世田谷区の不登校支援に関する取組について御紹介いたします。

こちらは、学校内における支援と学校外での支援について示したものです。まず、学校内における支援、左側に書かれているものです。令和6年3月に、不登校の未然防止、早期発見、早期対応、長期化した場合の支援など、各段階における対応の指針として不登校支援ガイドラインを策定しました。ここでは不登校児童生徒等への支援に関する基本的な考え方等を示しました。

区内小中学校に配置されているスクールカウンセラーは、区任用のスクールカウンセラーと都任用のスクールカウンセラーが曜日ごとに勤務しており、基本的に週2日から3日、学校にいますよう配置しています。

また、ほっとルーム、いわゆる別室登校支援については、令和7年度までに全小中学校に設置できるよう支援しています。令和7年度までに小学校は42校、中学校は25校設置されており、今年度設置予定の学校を含めると、小学校は51校、中学校では29校が別室を設けることになります。未設置の理由としては、別室を設けることなく不登校の未然防止や早期対応等の支援が円滑に行われている、別室を利用する児童がいないなどと聞いています。

学びの多様化学校分教室「ねいろ」、来年度開校予定の学びの多様化学校「北沢学園」につきましては、この後、御紹介していきますので、ここでは省略させていただきます。

学校外での支援についてです。世田谷区は、不登校児童生徒の心の居場所支援として、教育支援センター（ほっとスクール城山、尾山台、希望丘）の3つを設置しています。ここでは季節の行事や紙すきはがきを作成したり、野菜を育てたりなど、体験活動に楽しんでいたりと、そして、スタッフからの学習支援を受けながら自主学習に取り組んでいます。来年度開校予定の学びの多様化学校「北沢学園」には、世田谷区4か所目のほっとスクール北沢が併設されます。

教育相談室は、教育総合センター、玉川分室、砧分室、烏山分室と各地区に設置されており、職員は心理職です。ここでは来室による継続した定期的な相談だけでなく、保護者面接や子どもとの面接、プレイセラピーなどを行ったり、必要に応じて知能検査や心理検査も実施されます。

不登校支援窓口は教育総合センターにあり、心理職とスクールソーシャルワーカーが在籍しています。ここではアウトリーチによる支援や、不登校に関する電話や来室相談、不

登校保護者相談会等、幅広い支援を行っています。

それでは、ここからは学びの多様化学校について御紹介していきます。学びの多様化学校は、不登校児童生徒等の実態に配慮した特別の教育課程を編成して教育を行うことができる学校です。文部科学省の説明では教育課程の基準によらずにとありますが、これは教育課程を自由に決めることができるということではありません。学びの多様化学校は、教育課程を編成する際の基準となる学習指導要領にのっとりながら、その一部を不登校児童生徒等の実態に合わせて編成することができる学校です。そのため、学びの多様化学校としての特色はありますが、ほかの学校と同様に、授業や集団活動を行います。

学びの多様化学校の設置形態は、現在、本校型、分校型、分教室型、コース指定型の4つがあります。ここでは世田谷区と関わりのある本校型、分教室型について御説明いたします。

分教室型についてですが、これは、既存の学校の一部学級を学びの多様化学校として設置することができる形態です。この形態の場合、本校と同じ敷地内に設置できないため、公共施設に併設するなど、別の場所に設置する必要があります。令和4年4月に教育会館2階に開設した世田谷中学校分教室「ねいろ」は、この分教室型で開設しました。

次に、本校型についてです。これは、一つの学校全体を学びの多様化学校として設置することができる形態です。先ほど御説明した分教室型の分教室「ねいろ」は、校庭や体育館、理科室以外の特別教室がないため、一部の授業で学校施設を借り、授業を行っております。本校型として開校する北沢学園中学校は、これらの設備がそろっています。

特別な教育課程についてです。学びの多様化学校に通う生徒の社会的自立に向けて、生徒の実態に配慮した世田谷区独自の教育課程を作成し、一人一人の状況に応じた指導を行います。どちらも学びの多様化学校としての教育課程になりますので、基本的なものは大きく変わりません。もう一度授業に出て勉強したい、もう一度友達と学校生活を送りたいなど、もう一度という生徒の気持ちを大事にしています。世田谷中学校分教室「ねいろ」が目指す生徒像は、自分の明るい未来を描くことができる人、目標に向かって努力することができる人、他者と協力することができる人です。また、分教室「ねいろ」は、学び直しの機会を設け、生徒のしたい、やってみたいを大切にしています。学校生活のリスタートを切ることができる、これが大きな特色と言えます。また、異学年交流による学び合いや教え合いや生き方を考える授業を通して多様な価値観を認め合える関係性を築き、協働的な学びが行われています。

北沢学園中学校は、自分の将来へのリスタートを切ること为目标に、つながり、学びなおし、自己決定を3つの柱として教育課程を編成しています。一人一人の個性や実態に合わせた多様な学びを通じて、将来、社会、人、希望などにつながる、子どもたちのもう一度したい、やりたいという気持ちを大切に、できなかったことに挑戦できる、自分の思いや考えを安心して表現でき、自信を持って決定することができる、そんな学校を目指します。

先ほどのコンセプトを達成するために、学びの多様化学校における特別の教育課程では、新設教科を設置しています。分教室「ねいろ」では、探究、表現、体験という3つの新設教科があります。探究では、今までの学びで培った知識や経験などを活用しながら、学ぼうとする意欲や課題解決能力を伸ばします。探究の時間では、ねいろタイムと称し、将来設計力の基礎となるテーマ「生き方を考える～幸せとは～」について学びました。

表現では、実技教科の基礎的な学びの中で培った表現力を基に、自己表現する方法を学びます。表現の時間では、学年分け隔てなく同じ空間で学び合い、お互いのよい部分を評価するなど、自他ともに認め合える関係をつくり上げています。

体験では、校外学習や移動教室、修学旅行など、学校行事を中心に、子どものしたい、やりたいを大切にしながら学びを進めています。校外学習の行き先について、学年にこだわらないグループをつくり、なぜそこに行きたいのか、何を学ぶことができるのかなど、情報を収集、整理してプレゼンテーション資料を作成し、発表し、決めたりしていました。

総授業時間数ですが、通常の学校の総授業時間数が1015時間のところ、分教室「ねいろ」は910時間に設定し、基礎基本の学習を主に午前中に行い、午後は異学年交流による授業や体験活動、探究活動をメインとした多様な学びを実施しています。

北沢学園中学校では、キャリア・デザイン科、マイデザイン科、STEAM科の3つを新設教科として設置する予定です。総授業時間数ですが、通常の学校の総授業時間数が1015時間のところ、北沢学園中学校は840時間を設定する予定です。

キャリア・デザイン科では、自分の将来をデザインできる力の育成を図ります。体験活動や地域との交流活動等を通じたいろいろな人との関わり、学び合う過程において、自己理解、他者理解を深めます。

マイデザイン科は、実技教科の学びを通じて、思いや考えなどを自由に表現する方法や技能を身につけるとともに、多様な表現の仕方を学びます。

STEAM科は、中学3年生のみの授業となります。今までに学んだことを基盤とした

学習の総まとめとして、持続可能な社会のために何が必要なのか、自分ができることは何かなどについて考え、社会に役立つ、人に役立つ、自分に役立つものをつくり上げます。

ここからは、分教室「ねいろ」の現在について御紹介します。分教室「ねいろ」は、令和4年4月に世田谷中学校の分教室として世田谷区立教育会館の2階に開設しました。学校とは異なる雰囲気での学習できるのが分教室「ねいろ」の魅力の一つです。

教員体制についてです。分教室型の場合、東京都の基準により、校長と副校長は配置されません。本校との兼務になります。また、教員については、学級数に応じて配置されるほか、正規の教員の配置がない教科については、講師等による対応になります。

一日の過ごし方についてです。朝の登校時間は9時、午前の授業の開始の時間までは一日の流れを確認する、その日の目標を定める、友達と交流を図るなどし、授業への心構えを準備していきます。午前の授業は9時35分から開始し、学年ごとに教科の授業を行います。給食を食べ、お昼休みは友達や先生とゲームをしたり、ギターを弾いたりしながら思い思いの時間を過ごします。午後の授業は、学年の枠を超えた異学年交流による授業や体験活動等を行います。下校は15時45分、一日を振り返ってお互い頑張ったことやよかったことを共有し合い、認め合う時間を設けています。放課後は、他学年の学習内容や今学んでいる学習内容の復習などに取り組むことができるよう、放課後自習時間があります。分からないことなどはその場で先生に質問することもできます。

教室案内図です。教育会館2階のほぼワンフロアを使用して開設しています。また、3階には理科室、理科準備室があります。

ねいろの教室等の様子を写真で御紹介します。生徒たちが休み時間を過ごすスペースにもなっているホールの部分です。卓球台やピアノ、複数のソファや畳型のマットなどを設置しています。

普通教室です。全教室ホワイトボードにしています。

職員室です。

教育相談室です。週2日、スクールカウンセラーが勤務しています。

プレイルームです。3学年合同で行う授業や給食の際に利用しています。

3階の理科室です。

卒業生の進路になります。

続いて、北沢学園中学校についてです。令和8年4月に本校型の学びの多様化学校として開校予定です。北沢小学校があった場所で、現在は北沢中学校第2校舎として運営して

います。現時点では内装の改修工事が行われています。

教員体制です。本校型の場合は、校長、副校長が配置されます。また、9名の正規の教員が配置される予定です。配置のない教科につきましては、講師による対応となります。

一日の過ごし方です。朝の登校時間は9時、午前の授業は9時45分から学年ごとの教科の授業となります。給食、お昼休みを過ごし、午後は体験活動や探究など、多様な学びを行います。下校は15時45分、放課後は、生徒のやってみたい、取り組みたいが実現できるよう、サークル活動等、生徒主体の活動ができる時間にしていく予定です。また、区内の大学や都立高校の学生や生徒同士の交流の機会を設けたり、一緒に学んだりすることができるよう時間を設けていく予定です。

学園の案内図です。この北沢学園中学校には、教育支援センター（ほっとスクール）、放課後の子どもの居場所支援事業「きたっこ」が併設されます。

図の中央が2階です。こちらには校長室や職員室、教育相談室などを設けます。3階は、プレイルーム、普通教室、リラク্সルーム、音楽室などを設置する予定です。

こちらは、校庭から校舎を撮影しました。

現在の普通教室です。改修工事では、床の張り替え、壁の塗り直しなどを行います。また、黒板はホワイトボードに変更します。

現在の廊下です。こちらも床の張り替え、壁の塗り直し、照明のLED化を行います。プレイルームを設置予定のスペースです。

体育館です。照明のLED化、空調の入替えを行います。

校庭です。

学びの多様化学校の特徴について、これまでの説明内容をまとめました。

以上で説明を終わります。御清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会 御説明ありがとうございました。ただいま学びの多様化学校についてということで、現在進行形でございますけれども、世田谷中の分教室「ねいろ」の御紹介、それから来年4月開校予定ということで御紹介いただきました。実際にこういった目で見ることがあまりないのかなと思いますので、こういった写真とかも使って今日御紹介いただきましたので、こういった区が取組が皆様に伝わればいいなと思いました。ありがとうございました。

では、続きまして、事例の紹介2つ目でございます。「鎌倉市立由比ガ浜中学校（学びの多様化学校）での取組み内容について」ということで、同じく区の教育委員会事務局教育

相談課の竹内課長から御報告させていただきます。よろしくお願いします。

○竹内教育相談課長　こんにちは。教育相談課長の竹内と申します。よろしくお願いいたします。

鎌倉の由比ガ浜中学校というところがこの4月から学びの多様化学校ということで開設をされました。6月26日に教育委員会の先生方の視察ということで私も同席をさせていただきましたので、そのときの私個人の感想という形で御報告をさせていただきます。あわせて、今、森本指導主事から報告がありました世田谷区が取組と比べてどうだろうといったようなことも少し触れさせていただきます。

最初に、全国の学びの多様化学校、黒沢先生のお話にもありました。この4月にまた24校増えて63校、一部義務教育学校があるので、学校設備としては58ということになります。が、設置をされているという状況です。

類型が4つほどあります。小中学校においては3つ、先ほど来説明されている本校型と分教室型、そしてもう一つ、分校型というのがございます。鎌倉の由比ガ浜中学校は分校型になります。

視察をして、感想としては3点ほどにまとめさせていただいています。1つが分校方式というもの、これは最近、この一、二年で始まっている方式です。そして、特別な教育課程ULTLAというもの、そして民間企業とのタイアップという3点について、特徴かなというふうに受け止めました。

まず最初に、設置形態の分校型ということなんですが——先に世田谷のねいろの分教室型がありました。当初、文科省では一条校、学校型しか想定していなかったようなんですが、東京都の各自治体で一条校をつくるのは難しいよということで分教室型というのを提唱して、認められたという経緯があるようです。

メリットとしては、ねいろもそうですが、公共施設のスペースを利用して、ねいろの場合、当初はほとんど改修もしないで空いたスペースで始めていますので、費用を抑制できると。届出としましても、学校設置の届出は要りませんので、教育課程の届出だけで教室の届出をしていけばいいということで、事務手続としてもかなり簡単です。

一方、デメリットとしては、学校の管理職がその場にいないですとか、先ほどねいろの教員の数は6人と出ていますが、本来の定数上の数字で言うと4名、クラス数3プラス1ということで、世田谷中学校さんの努力として今6名を配置していただいているということで、先生の数に限られるというところ。そして、その後、教育環境としても部屋数等々

を変えていくことができませんので、限られるというところが欠点かなというふうに考えています。

一方、分校型という、最近、神奈川県なんかで主に取り組んできていますけれども、本校から分離して別の敷地に設置するという形なんですけど、分校はもともと過疎の地域なんかである仕組みですけれども、校庭や体育館があるのは当たり前なのかなというふうに受け止めていたんですが、この鎌倉の由比ガ浜は、校庭は本当に狭いものしかないですし、体育館はないんですね。そういうことでも分校と認められるということなので、そういう方式もあるのかなということを感じました。分校であれば副校長と正規の教員9名が配属されるということになります。うちの職員たちとも話しているんですけども、今、ねいろを改めて分校として届け出ることは可能なのかなと。そうしたら通るかなという話で、今のいろんな文科省から出ている書類を読む限り、通るんじゃないかなというふうに見ていて、そうすれば、ねいろの一番の悩みである教員の不足というところも解決するのかなというふうに学んだ次第です。

このところは少し学校設置者の立場に寄り過ぎた説明になっているなと思ひまして、ちょっと鎌倉の話からはそれるんですが、世田谷での取組、特に生徒の皆さん、保護者の皆様にとってこの違いはどう受け止められるんだろうということでも少しお話をさせていただきます。

というのも、この間、冒頭、区長からお話があったとおり、この場で両校の説明会をやって、私どもも最初は60名ぐらいいらっしゃればいいかなというふうに思っていたら140名の方が来て、当事者としては結構慌てましたけれども、本当にたくさんの方にいらしていただいて、たくさんの質問を受けました。一番多かった質問として、一条校と分教室の違いはどこにあるんですかと、どっちが向いているんでしょうか、どっちがいいですかなんていう質問も受けるわけなんですけれども、どっちがいいですかと聞かれると、私としてはどちらもいいですよとしかお答えできないんですけれども、どこが違うのかということなんですけど、教育内容については、先ほど森本指導主事から御説明したとおり、両方とも教育課程での特例という形で不登校の経験のある生徒の皆さんが主体的に学びにつけるような工夫をして教育課程を編成しておりますので、どちらも変わりはないというふうに捉えています。

環境はやっぱり変わりました、これも今月、暑い中、学校の現地見学会というのを2度ほどやったんですが、そこでやはり多くの保護者の方から体育館とか運動施設はないんで

すか、そういう場所はなくで大丈夫ですかという御質問が結構ありました。週に1度、近くの学校に行って体育の時間を取っていると。そうすると、皆さん本当に元気に体を動かすんですね。日常的にそういう機会がねいろの生徒の皆さんにはないというところは申し訳ないところではあるんです。

そういう教育環境の足りない部分もありますが、一方、教育会館は1階に中央図書館があつたり、喫茶店があつたり、あとプラネタリウムがあるという場所ですので、学校に入っていくというようなハードルはない。割と気軽に入れるというメリットはあるのかなというふうに思います。また、500名、600名という生徒がいて、一斉に動く、昼休みなんかも非常ににぎやかになるというようなことがなくて、静かな環境の中で学べるというところがメリットかなというふうに思います。

そういう一般的な違いに加えて、世田谷中学校分教室「ねいろ」の特別な特色として、本校との交流が非常に密にあるというところがあるかなというふうに思っています。具体的に言うと、運動会と学芸発表会というイベントがありまして、その2つにねいろがチームねいろみたいな形で参加しております。今年状況なんかも校長先生から伺ったところと言うと、今日、保護者の皆さんとかがお話を聞いていると、不登校のお子さんたちは運動会とか、学芸発表会とかは苦手なんじゃないか、出たがらないんじゃないかというふうに思われると思います。実際、ねいろの生徒さんも半分ぐらいの方はそうなんですけれども、もちろんそういう場に喜んで参加したいという生徒の方もいらっしゃるの、そういう中で自分たちと密接にねいろで学んでいる仲間がそういうところで選手として出場したり、演劇の舞台に立つということになると、周りの生徒たちも一生懸命応援するんですね。あるいはそういうところに刺激を受けまして、今年の運動会でも今まで運動会で一度も走ったことがないという生徒が急にリレーで自分も走ると言って参加して走ったというようなことがあったり、また、学芸発表会、これはおととしの演目ですが、不登校を題材にして自らの経験を語るというような演劇をやりまして、世田谷中の学芸発表会のトップバッターがねいろなんですけれども、大変いい劇をやられて、一般のクラスの生徒たちからもとても評判がよかった。そういう劇に出演するお子さんたちだけでなく、大道具であったり、いろいろ裏方に回る生徒たちも含めてみんなで取り組むというようなことが実際取り組まれています。

やはり不登校で静かな環境で少人数で学んでいくということは、まず安心な場所を確保するという意味で大事なんだろうなというふうに思いますが、同時に、晴れの舞台といい

ますか、大きな舞台で何か活躍をするという経験をしていただくということも意味があるのかなというふうに思います。そういう意味では、今度つくります北沢学園中学校は一条校、独立した学校になりますので、最大で60名という規模の中で取り組みます。ですから、本校がある世田谷中学校分教室とは違った取組になるわけですが、先ほど来御説明しているとおり、北沢学園中学校にはほんとスクールが併設される。また、紹介がありました児童館の分室「きたっこ」も入るということで、様々な立場の子どもたちが集うという中で一緒に活動するというのが1つ。そして、地域活動が非常に活発な地域でございますので、地域の皆さんの御協力をいただいて、地域の皆さんの発表の場に参加をしていくというような機会もつくっていきたい。そういう少人数の学園での静かな生活と晴れの舞台みたいなものと併せて取り組んでいくことができればなというふうに考えているところでございます。

ちょっと話が横へそれました。鎌倉のほうへ話を戻させていただきます。かまくらULTLAプログラムというのが令和3年度から実施をされています。ULTLAと何かちょっと難しい言葉ですが、学びの最適化と評価による個性の開放という英語も日本語も難しいんですけども、まず、アセスメントということで自己診断をやっていただく。得意な分野だとか、興味のある分野を自分なりにいろんな簡単なテストみたいなものをやりながら見つけていって、そしてそれに基づいたいろんなプログラムに参加をしていくという形で取り組んでいるということで、不登校の児童生徒を対象に特別な学校をつくるということではなくて、ややイベント的なんですが、3日間の探究型のプログラムを令和3年度から年中行事として取り組んできているということで、6年度の取組としては、海のプログラム「とどまるチカラ」というのと、森のプログラム「いしのキセキ」というのに取り組んだということを伺いました。この中で、取組に当たっては、まず御自分の自己分析をして得意な分野から入って、その得意な分野を伸ばしていくような探究をしていくというようなことをやられているように伺いました。

この由比ガ浜中学校の中では梅の探究というんですかね、理科と技術・家庭科を組み合わせた授業ということで取り組んでおられるという説明を伺いました。何で鎌倉に梅がたくさんあるのかということを勉強した人であったり、梅の実のなり方について生物学的な勉強であったり、また、梅シロップを作っていましたけれども、梅酒ではなかったですね。そういうことをやるお子さんであったり、自分の興味、関心に応じた様々な形で梅について研究するというような授業をULTLAという科目で取り組んでいるということで、先

ほど森本指導主事から説明のあった世田谷区でも取り組む探究的な学びと大体同じような内容で取り組まれているというふうに受け止めていただきました。

最後に、3点目の特色として、鎌倉市は企業とのタイアップをたくさんやっています、これはリラックスルームのようなところなんですけれども、プレイルームですかね。I K E Aがこれを提供していて、I K E Aの家具は大体自分で組み立てなきゃいけない形になっていますので、素材が提供されて、入校が決まった保護者の皆さんが集まって、先生方と一緒にこの形で組み立てたそうなんですけれども、そういう取組をしながらこの部屋をつくったということでした。

こちらもI K E Aの提供という形ですね。

世田谷区のほっとスクールなんかにも書籍をたくさん置いてありますが、これはブックオフから提供を受けたということだそうです。

また、学び場、教室については、ガイアエデュケーションというところから提供を受けたということで、なかなか学校をつくるというのはお金が大変かかるところで、鎌倉市ではなかなか、教育長をはじめ、やり手の方々がこういう企業と交流をして、いろいろと提供を受けたということです。

世田谷区においても、こういう物の提供ということではないんですが、教育総合センターにおいては、地域で学ぶというようなことで、キャリアデザイン教育の中で銀行であったり、地元の優良企業だったり、いろんな方々から学びの場を、機会を提供いただいたり、いろんな形で協力をいただいております。そういったものも北沢学園の中で生かしていけるのかなというふうなところを感じた次第でございます。

鎌倉の発表なのか、世田谷の発表なのかちょっと分からなくなりましたが、由比ガ浜中学校を視察した感想と、世田谷の今の取組状況ということで御報告させていただきました。どうもありがとうございました。(拍手)

○司会 ありがとうございます。

ただいま由比ガ浜中学校での取組ということと、区のほうの例も出していただきながら御報告をいただきました。ありがとうございます。鎌倉の事例ですと、先ほどのI K E Aとか、民間企業とのコラボというのもあって、特色がある取組をされているのかなというふうに思いましたし、また、立地条件としても世田谷と鎌倉では大分違いますので、海があつたりなかったりとか、そういうところもあるので、世田谷らしさのある、特徴のある学校ができればいいのかなというふうに聞いていて感じました感想です。

それでは、この後、休憩を挟みまして意見交換に移ります。場面転換をいたしますので、ちょっとお時間をいただければと思います。また、この休憩時間の間に、会場では、質問がある方につきましては、入り口で先に質問票をお配りしていますので、もしある方は会場の職員に紙をお渡しいただければと思います。また、オンラインで御参加の方については、Z o o m機能の中にQ & A機能というものがありますので、それで御質問をお寄せいただければと思います。

では、配置転換も含めて休憩に入りまして、今、そちらの時計でいきますと2時55分から再開ということで10分ちょっと休憩に入りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

では、一旦ここで休憩に入ります。お疲れさまでした。

(休憩)

○司会 それでは、時間になりましたので、第2部を始めさせていただきます。

ここからは前半の内容を踏まえまして、区長、教育委員会による意見交換ということで始めさせていただきます。また、前半で御講演いただきました黒沢様と教育委員会事務局の職員の方にも登壇いただきまして、一緒に議論に加わっていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

ここからの意見交換につきましては、政策経営部の有馬部長に進行を務めていただきます。それでは、よろしくお願いいたします。

○有馬政策経営部長 改めまして政策経営部長の有馬です。よろしくお願いいたします。

では、これから意見交換を1時間をめどに進めたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

早速ではございますが、前半の基調講演、取組事例に対する感想、意見をいただきたいと思います。

それでは、初めに、澁澤委員からお願いしてよろしいですか。

○澁澤委員 黒沢先生、ありがとうございました。この後の北沢学園のお話のときもそうなのですが、この会でも何回かこの議題に対してはディスカッションをしてまいりましたし、私どもも高尾山学園からいろんなお教えをいただきながら北沢学園に至るという経緯もありますので、ここで改めてまたその話というのもどうかと思っています。最近、私はつくづく考えたんですが、私の周りに不登校だった連中たちはどのぐらいいるだろうという、実は私はNPOをやっていると、結構の人間が不登校経験者なんですよ。

その連中たちとこの間久しぶりにゆっくり話をしたんですけれども、不登校になって一番もがいた、苦しかった部分は何かといったら、ほとんどの人たちが自分が不登校からひきこもりにならないようにというストレスが物すごく強かったと言っています。

今、社会から見ていると、不登校の子たちはひきこもりの子なんでしょう、それから学ぶことに意欲がない子なんだろうという十把一からげに見ていく風潮があるんですが、実は不登校の側から見ると、やっぱり学びたいという意欲をすごくたくさん持っている子が多い。それはねいろの実績を見ても本当にそういう子どもたちが多い。それから、何よりも彼らは社会性を求めている。どうやって自分が社会の中でこれから自分の人生を切り開いていけるのかという部分、だからひきこもりになっちゃわないようにどうしたらいいかということが一番考えているのは不登校の子たちだということに私は気づかされて、本当に目からうろこの思いがありました。

そうすると、要するに、今回の学びの多様化学校もそうですが、基本的に彼らが基礎学力、それと社会性、社会性のほうが多いんですよと黒沢先生もお話をされていました。その社会性を持たせるためには、本来は家庭であったり、学校であったりということなんだろうけれども、不登校だった経験者たちというと、やっぱり家庭での不和ですとか、それから学校でのちょっとしたことでの不信感みたいなことが大きくなって、それを救ってくれたのは友達とか、それから学校とは全然関係ない地域社会の大人たちであったりとか、あるいはスポーツクラブの先輩であったりというのが救ってくれたと。やっぱり彼らがいたことがどんなに自分は心強かったかということを中心に話をしていた。そうすると、やっぱり今度の学びの多様化学校をつくるで終わってしまうのではなくて、そこでどうやって地域社会と一緒に取り組んでいけるかとか、あるいは企業も含めてですけれども、違うファクターとどういうふうに取り組んでいけるかということを私ども行政サイドも積極的にその場をつくっていくという努力が、単なる学校をつくれればいいではなくて、そこからどういう関係を持った場をつくっていけるか、それが一番重要なかなと思って聞いておりました。ありがとうございました。

○有馬政策経営部長　ありがとうございました。今日は教育委員会の方々中心にお話していますけれども、本来であれば、こういった問題というのは区全体、福祉も含めて話すべきだと思いました。

後ほど黒沢先生にはまとめてまた御意見を伺いたいと思いますので、各委員の意見から先に伺いたいと思います。

続いて、中村委員、お願いしてよろしいでしょうか。

○中村委員 黒沢先生、ありがとうございました。くしくも最近、ネットのニュースで小田急が不登校経験のある社員さんの提案でフリースクールをつくったというニュースもありましたけれども、不登校問題はそういう形で今かなり重要な課題になっておりますが、私ども学校サイドに勤めていた人間からすると、やはりいろんな見方を変えなきゃいけない本当に転換の時期かなと。つまり、今まで私どもも保護者の方もそうですが、我々が育った世代というのは、学校というのは将来社会に出るための修行とトレーニングの場という捉え方が一般的だったと思うんですけれども、今はそうじゃないんだと。子どもたちにとって学校とは安心・安全な居場所であるべき場所である、それから自己肯定感を育む場所であるという、この2つに尽きるんじゃないかなと思っております。

だから、当然これからの学校に求められるのは、子ども中心の視点から柔軟な制度設計、それから教育、福祉、地域、今、企業の話もありましたけれども、そういう様々な分野との連携が求められている。そういった学校にしていかなきゃいけないんだなということは高尾山学園の事例もそうですし、鎌倉の事例もそうですけれども、今全国で展開している様々な事例から我々が考えなきゃいけないことなのかなと思っております。そんなことを感想として持ちました。

また、北沢学園のところで今後の課題等についてはお話ししたいと思っておりますけれども、とにかく学校観の転換というのが一番必要なんじゃないかなというのを感じた次第でございます。以上です。

○有馬政策経営部長 ありがとうございました。

では、続きまして、鈴木委員、お願いしてよろしいでしょうか。

○鈴木委員 まず、黒沢先生ありがとうございました。どうしても私は保護者ですので、保護者視点というか、保護者目線で話を聞いてしまうのですけれども、やはり先生のお話でもあったんですが、子どもも教員も安心して過ごせる学びやすい学校づくりが重要なかなと思いながら話を伺っていました。私としては、いろいろな学びの多様化学校が各地でできてくるということで、そういうことが保護者にとっても一縷の光になってほしいなと思っております。やはり子どもの不登校については、子ども自身もつらい、周りの人も先生方もつらいと思うんですけれども、保護者という立場としても非常に不安でつらくて、どうしたらいいんだろう、先が見えないな、どうして自分の子に限ってこうなってしまったんだろうとか、いろいろ悩みも尽きないと思うんですね。親の孤独感の解消や不安の解

消が非常に課題になっているかなと思っております。

やはり学びというのは一人では成り立ちませんので、教材や他者との関わりを通して学びを得られる、学び上手になれる場所が必要だなと思いながら先生のお話を伺っております。この先もまた話が展開していくと思いますので、また私の意見を述べてまいりたいと思います。以上です。

○有馬政策経営部長 ありがとうございました。

では、続きまして、坂倉委員、お願いしてよろしいですか。

○坂倉委員 黒沢先生ありがとうございました。本当に一番感銘を受けたのが、多様化学校を全国で300校整備していきたいのだ。やはりそういった学びの多様性、成長の場の多様性が社会一般に当たり前になっていくということが何よりの出発点なんだろうなというふうに改めて思って、そういうふうな未来を描いていくといいなということを思いました。

同時に僕がちょっと思ったのは、私の大学の学部の1年生は、入った最初の1学期に世田谷区の問題を調べて20年後の世田谷区の暮らしを提案するというのやっているんですね。私のクラスのチームが世田谷の不登校の問題を考えるんだとやってきたんです。彼女たちの提案というのは非常に面白くて、不登校をなくすプロジェクトの解決策は、世田谷区から中学校をなくすというプランだったんですね。学校がなくなれば不登校の問題はなくなるじゃんみたいな。皆さん、どう思われますか。教育委員会の場でそんなことを言っても誰も首を縦には振りづらいというのはあるんですけども、イノベーションの考え方として非常にいいセンスというか、的を射ていて、問題の根源がなくなれば問題は発生しないわけですよねみたいなことと、あと、そうはいつでも彼女たちは学校を憎んでなくすと言っているわけじゃなくて、自分たちが本当に必要な社会に出ていくための力を身につけるために何が必要かという、彼女たちが言っていたのはまさに黒沢先生が先ほど指摘してくださって、学生の考えというのはあながち間違っていないなと思ったのが、基礎学力と社会性なんですね。学生の提案で面白かったのは、基礎学力はどうやっても学べるわけですよね。確かにディスタンスラーニング、あるいはディスタンスエデュケーションというのがどんどん発達していったって、ある程度学力というのはみんなで一緒にやらないと何となくできることが分かってきている。だけれども、社会性はどうなのみたいになったときに、そこで新しく学校という場の考え方が全く変わってくるんじゃないみたいな提案をしてくれて、何か賞を取っていたんですけども、非常になるほどなと思いました。

何かというと、先ほどの話を受けると、子どもが健やかに、学校に行っても行かなくて

もししっかりその人の人生を歩んでいくために何が必要なのかということについては、昔だったらとにかく修行とトレーニングの場でしたか、学校に行きさえすれば大丈夫だというふうになっていたんだけど、もうちょっとブレイクダウンしていく必要があるんだろうなと。学力については、あるいは社会性については、では社会性のうち、こういう経験については、そういうものをみんなが自分なりの人生を選択できるような社会になっていくといいななんていうことを、今日の話は公共的に提供する学びの場ですけれども、これ以外にフリースクールとか、あるいは私立のいろんな学校とか、あるいは医療機関とか、様々な関係者、あるいは不登校になってお父さん、お母さんが大変なのはこの先どうなるかという不安もありますけれども、ゆっくりしていてもいいんだけど、お金とかもかかりますよねとか、そういう経済的なサポートみたいなのところも含めていろんな形で支えられる社会を考えたときに、やっぱり学校の中だけというよりも、その外側でどんなことが起こっているのかみたいなことも考えていく必要があるんだろうなというのを改めて思いました。

○有馬政策経営部長 ありがとうございます。学生の中学校をなくすという斬新なのも一度は受け止めなければいけないんだなとちょっと思いました。

では、続きまして、教育長、お願いしてよろしいですか。

○知久教育長 黒沢先生、御講演ありがとうございました。御説明いただいた高尾山学園の取組の中で、子どもたちの登校支援策というんでしょうか、「楽しい・嬉しい・美味しい＋安心感と知的好奇心」といった登校刺激策が必要だよということでお話いただきました。

実は、この4月に開校する北沢学園なんですけれども、その教育目標には、不登校生徒が登校するという結果のみを目的とするのではなく、このようなくだりがあって、生徒の登校に関する考え方を示しています。学校関係者からすると、学校に来てもらう登校率というのは気にはするんですけれども、そこを学びの多様化学校で目標にしている学校というのはほぼないんじゃないかなというふうに思っています。

そんな中、今日も会場に来ていただいているんですけれども、ねいろの校長先生とお話をする機会があって、次のように示唆に富んだことをいただきました。不登校ぎみの子どもたちも学校行事ですとか、宿泊行事、そんなものに積極的に参加すると。そうであるならば、出席率、登校率を上げることを目標とすること自体にも意味があるんじゃないかというような趣旨のことをお話いただきました。もちろん、登校率アップを子どもたちに

強制するという意味ではなくて、学校ですとか、教員が登校したくなる行事とか学びを工夫することで生徒の登校を後押しして、結果として子どもたちの幸福感、エンゲージメントなどが高まるんじゃないかと。そんな趣旨の発言だと思いました。

そんなお話を聞いていた視点と先ほどの黒沢先生との御講演が重なったんですが、先ほど適切なK P Iを設定し、成果の見える化というお話もある中で、そういう登校率のアップを成果の指標とすることがあり得るのかを時間があればお聞きできればいいかなと思いました。

○有馬政策経営部長　ありがとうございます。

今、ちょっとK P Iの話が出ましたので、黒沢先生にお願いしてよろしいですか。

○黒沢氏　K P Iの話なんですけれども、高尾山学園ではチャレンジセブンという経営目標があるんですね。これは子ども向けの指標ではなくて、教員向けの指標なんです。あなたのクラスの子どもたちの登校はどのくらいを目標にして学級経営しますか、あなたの授業はどのくらいの参加率を目標に教科指導しますか、そういう指標なんです。決して子どもに向けて、来なさいよ、数字目標だというのはなくて、教員向けなんですよ。その指標に自然に到達できる先生は、やっぱり頑張っている先生ですね。全然数値を無視して、そんなのは子どもたちが来ないだけなんだから登校率なんかは関係ないという先生は、僕から見ると異動対象なんです。やっぱり自己申告を教員みんな書きますけれども、その自己申告の中で、あなたはこの重要指標を——チャレンジセブンプラスと言うんですけれども——そのチャレンジセブンのどこを注力して学級経営あるいは学校経営しますかということ問いかけながら先生方にある意味プレッシャーを与えつつ、目標にしてもらい、その中で成果を出してもらおう。結果は、最後に僕が求めるのは登校率でも何でもなくて、進学率なんです。高校にどのくらい進学できましたか。それも希望進学率。本人が希望したところへどれだけ一発で合格できるのか。加えて、高校に進学した後の在籍率です。卒業したけれども、すぐ辞めちゃったら意味がないんですね。2年後、3年後、4年後、卒業した後、5年後、6年後までずっと追跡調査で追っかけて行って、追っかけた成果としてこのくらいの数字で卒業生はなっていますという、これは対外的な評価指標として僕は出しているところなんですけれども、それを先生方を見ると、逆に自信につながるんですね。僕の指導の仕方でもよかったんだ、僕のやり方でこうなったんだ。そういう先生方の気づきと目標値と、実際にそれで達成感を味わえるという仕組みとして学校の中で運営しています。よろしいでしょうか。

○有馬政策経営部長 ありがとうございました。

それでは、ここまで区長、様々意見もありましたし、講演を聞いていかがでしたでしょうか。

○保坂区長 黒沢先生のお話を聞いて、高尾山学園の中で印象に残ったのは、子どもがどこで、教室にいるのか、プレイルームにいるのか、保健室にいるのか、どこを選んで勉強してもいいというあたりがちょっとヒントになるなというふうに思いました。

今現在、多分私の世代、1960年代に小学生だったという世代からすると、当時の経済界は、期待される人間像、こういう人間をつくってくれということを言っていて、正確な処理能力とか、指示どおりに素直に動く、そしてまた、集団的な協調性があるという、つまり工場で正確に欠品を出さずにもものづくりをやっていく、そういう担い手を育成していく教育だったわけなんですけど、現在、海外にあれだけ看板があった日本の電化製品のメーカーは次々と海外へ売却され、またもう1社大きなところが売却という話があるということで、社会自体非常に大きく変容したということがこの問題の根底にあると思います。つまり、学校に行きたがらない、あるいは学校となかなか歯車が合わないということ自体が、その子自身が持っている問題というよりは学校教育全体の大きな曲がり角というか、転換点というか、そのことを表しているんじゃないかというふうに思います。

ですから、北沢学園でこれからトライする学びというのが、文科省は、一応教育課程を全部ばらして自由に編成しとは言っていないんですけども、しかしながら、ある程度自由度を持ってトータルに学び、そして自らの力で開拓をして、あるいはチームで対話を重ねながら一つの問題を解決していく力、そういうことがやはりこの時代に必要なんだということを改めて感じました。

世田谷区の教育委員会の中村教育委員も一緒に行ったんですが、イエナプラン教育の場所を見てきました。10年前で、日本はこういうふうにならないだろうなんて、大分落差があるなという感想があったと思うんですけども、イエナプラン教育のオランダの教室では一人一人が全く違う、数学をやっていたり、ネルソン・マンデラの生涯を調べていたり、やっていることは全部違って、でも、最後はプレゼンテーションという、地域の人に自分たちはこういうふうに調べたんだということをやっていく。そこが一つの出口なんだという話を聞きました。この北沢学園中でもそういうプレゼンテーション、発表会というのが計画されているということなので、そこは大いに期待できるなと思いますし、そういう意味で結果のみ、つまり学校に来るか来ないかということよりも、新しい学びの萌

芽がそこで生み出されていく中で、やっぱり世田谷区や日本中の学校自体が突き当たっている壁を薄くしていく、あるいは切り開いていくヒントは籠もっているといいなというふうに思いました。

○有馬政策経営部長　ありがとうございました。

すみません、度々黒沢先生、今、教育委員、教育長、区長から様々な意見が出ましたけれども、何かコメント等をいただけますでしょうか。

○黒沢氏　心の準備がないままに質問が来ましたが、やっぱり学校は楽しいというところと、ある程度つらいことも経験させるという二律相反するものをどううまく混ぜ合わせながらやっていくかというところは教員の腕にかかってくところが結構大きいんですけれども、それを担任の1人だけに任せるんじゃなくて、チーム学校、あるいは地域も含めた中で一緒にやっていると、片や厳しく言う人もいるけれども、片や優しく言ってくれる。僕は、学校は母性と父性がバランスよくあるべきだと思うんですけれども、その中で多様化学校というのは、ある意味母性の学校なんですね。でも、父性ゼロではいけないと思っているんです。叱るべきときは叱る、でも叱り過ぎない。最後は優しく包んであげて、よし、頑張ろう。いや、間違っちゃったな、素直に謝ろう、そういう気持ちにさせるのがすごく重要で、指示的にやりなさいとか、これをしなさいとかというような指導からは脱却して、自らがちゃんと考えて行動できるというような学校にしていくのが僕は一番いいかなと思うんですけれども、それができる先生はなかなかいない。できるようになったと思うと異動になっちゃうんですね。なので、高尾山学園でもなかなか難しかったんですけれども、ぜひ北沢学園さんでもそのあたりも少し頭に入れながら学校経営されていくといいんじゃないかななんて思います。

○有馬政策経営部長　ありがとうございました。

畳みかけるようで申し訳ないんですけれども、会場からちょうど質問が出ているので、併せて聞いてしまいたいんですが、よろしいでしょうか。

まず最初に、高尾山学園では定期テストと学習の評価はどんな考え方をベースに行っているんでしょうかというのがありますが、これにお答えいただいてもよろしいですか。

○黒沢氏　これは心の準備ができていましたので。まず、定期テストはありません。基本ないんです。2学期制の学校なんですね。一時期2学期制がはやりましたが、今は3学期制にまた戻っちゃって。高尾山学園はずっと2学期制なんです。これは何がいいかというと、春休み、夏休み、秋休み、冬休みなんです。だから、大体長くても2か月ちょっとぐ

らい学校へ行けば休みがやってくるんですよ。そうすると、それが目標になったりする。先生方も成績は2回つけばいいだけなので、ちょっと楽なんです。しかも、その成績も定期テストはないです。単元テストはありますけれども。評価、評定については、基本は所見なんです。ただし、中3は受験がありますので、5、4、3、2、1をつけざるを得ないので、だから定期テストに近いようなものを確認テストという形でテストは実施します。でも、中1、中2、小学校もそうですけれども、通知表は全て所見で、ここは頑張りましたね、ここは頑張れ、頑張れないと書くと否定的になるので、ここは期待して待っていますよぐらいにして、そういう所見で書いてあげることで自己肯定感は下がらないです。大体どこの子も、特に不登校を経験した子は、通知表をもらうと自己肯定感が下がるはずなんです。ずっと避けてきたはずなんです。不登校で成績オール5なんて僕は聞いたことがないので、自己肯定感が下がらないようにどう工夫するかというのは通知表一つ取ってもいろいろ考えられるんじゃないかなというのは思います。

○有馬政策経営部長 ありがとうございます。

北沢学園ではどうするか決まっているんですか。これから検討ですかね。

○森本指導主事 これから検討になるのかなと思います。

○有馬政策経営部長 むちゃ振りしてすみませんでした。では、今後はこういった御意見も踏まえて検討していただければと思います。

すみません、黒沢先生にもう1点、高尾山学園における子どもが成長、自己意欲と実感できる、友達と協力し合える体制について具体的に教えていただけないでしょうかと会場から御質問をいただいています。

○黒沢氏 これも準備していましたので大丈夫です。まず、不登校の子どもたちは褒めてあげることが重要なんです。分かったとか、できたとか、褒められたというのについて。僕が一番効くなと思っているのは、誰かと協力してやり遂げるという経験。不登校の子たちは割とやり遂げている経験を持っていないんですね。いろんなことが挫折しているんです。だから、ささいなことでもやり遂げるという経験はすごく重要です。しかも、それに友達がついていれば、より高いんです。

簡単なところで言うとジグソーパズル。誰でもできます。友達と協力し合えます。やりかけでもできる。最後の1ピースがはまるとすごい自己肯定感が上がるんですね。こんなものもありますし、音楽の授業だとか、家庭科の授業は、実は協力型の授業が結構多いんですね。みんなで歌を歌って、きれいに歌えた。みんなで調理実習をやっておいしいものが

できた。体育もそうです。みんなで頑張ってちゃんとゲームが成り立ったなんていうのもありますし、みんなと協力してやり遂げるシーンというのは結構多いんですね。これに「おいしい」が重なるとよりいいんです。調理実習なんてまさにそうです。

こんな例もあります。夏休み中に登校日はどの学校も多分あると思うんですけども、高尾山学園に僕が赴任したときは登校日に来る子なんて1人もいなかったんです。来る意味がない。暑いし。こんな発想なんですけれども、あるとき、教員から、「校長先生、バーベキューを登校日にやっていいですか。お金を取ってバーベキューをやります」「この暑いのにバーベキューなんかやるの?」「やらせてください」「じゃあ、やれよ」と言ったら全員来ました。目的があって、それが楽しいものだ、ほっておいても来るんですね。登校率なんて気にしなくなるくらい元気に来るんです。そういうのを一つ取ってもみんなで楽しい思いをした、みんなで協力し合えた、みんなでおいしかったなというのを繰り返していくと、いつの間にか不登校じゃない普通の子どもになっていく。こんなことも出ましたので、友達と協力し合うというのはどのシーンでもありますから、工夫できると思います。

○有馬政策経営部長 とても具体的に提示していただきましてありがとうございます。

では、これらを踏まえまして、教育委員の皆様から北沢学園中学校に期待したいことについて伺いしたいと思いますので、また澁澤委員からお願いしてよろしいですか。

○澁澤委員 本当に皆さんの努力というか、随分議論の末にこの北沢学園が生まれたんだというふうに実感をしています。ただ、今日、これを御覧になっている区民の皆さんの多くの関心は、先ほどちょっと有馬さんもお話になっていたけれども、どこがお得なんですか、要するに、北沢学園に行ったらいいんですか、ねいろに行ったらいいんですか、自分の子はそうじゃなくて、普通の学校に行かせて、そこで対応していただいたほうがいいんですかというふうに、その部分が一番関心事だと思うんですけども、ある意味では、世田谷は北沢学園ができたことによって、ある程度の受入れ態勢としてのスペックはそろったのかなという気はしているんです。それを言われると大変反感を持たれる方もいらっしゃると思うんですが、これは何も公立が全部提供しているというだけの意味ではなくて、私立ですとか、先ほど言った企業さんですとか、そういうことも含めて学ぶ場というのは、逆に区民の側が意外と選べるだけの相当多様な学びの提供がある。ただ、1つ重要なことは、そこで全て解決するわけではなくて、実は学びの場というのは、その先にある自分の人生のもっとはるか長い時間の入り口でしかないわけで、それは途中でほかのやり方に移ってもいい。つまり、普通級に戻ってもいいし、またもう1回学びの多様化学校へ来ても

いいし、今はこれだけAIが進んでいますから、学ぶということで考えれば、タブレットがあればそれこそ世界中の図書館にどんどんアクセスができて幾らでも学ぶことができますし、私も大学の研究室におりましたけれども、今にしてみれば不登校なんですけれども、あの中学生は学校へ行っているのかねというような子がずっと大学の研究室と一緒に研究をやっていたという子もいました。ですから、本当に今の世の中、あらゆる選択肢というものは残されている。その中で学校とは何か、先ほど坂倉先生のお話ですが、それでは学校とは何ですかと言われたときに、私は、子どもたちから見ると、子どもたちのつくる社会だというふうに思っています。

私は、主役は子どもたちだと思っています。教員はそのファシリテーターであり、一番信頼できる大人としてそこに存在しますし、それから、地域社会の人間は、まさに一緒に目線で考えてあげる仲間として多分存在すると。だけれども、やはり自分たちのつくるある意味で疑似社会なんです、その疑似社会を経験するということで、これから子どもたちが社会へ出たときにいろいろな人と協力をするとか、人の心を考えるとか、そういうようなものを自然に身につけていく。そのための装置が多分学校という装置なんだろうというふうに思っています。ですから、その装置を子どもたちにどう利用してもらえるか、あるいはどういうふうにその利用したものを社会に見せていけるか。それはまさに教育の現場にいると分かるんですが、それは未来社会そのものだと思っています。

この不登校の子どもたちがここからどう育っていくかというのは、私たちの今生きている社会の10年後がどういう社会になるかということとほぼイコールだというふうに私は実感を持っています。そんな意味で、みんなで地域社会や企業も含めて、それから公立、私立関係なく教育に携わる者たちが子どもたちと一緒に新しい社会をつくるんだという視点で学びの多様化学校が育っていったらいい、その拠点になっていけばいいなというふうに私は期待をしています。

○有馬政策経営部長 ありがとうございました。全員の御意見をいただいてから教育長にコメントをいただきたいと思いますので、続きまして、中村委員、お願いいたします。

○中村委員 北沢学園についてですけれども、もう既におやりになっている部分、心理的安全性あたりは心理スタッフを充実させるというお話も聞いていますし、あと、もう一つよくあるのが校舎の設計やインテリア、とにかく落ち着ける空間づくりというあたりもいろいろ参考にされていると思います。

やはり1つ大きな課題は、さっきもまだこれからですというお話がありましたけれども、

テストや成績に偏らないプロセス重視の評価方法をどうやって確立していくかという、このあたりが非常に大きな課題となります。非常にネックなのが、こんなことを言っては怒られるかもしれませんが、東京都の高校入試制度における調査書点というのがいろんな点で非常に難しい部分がありまして、そことの整合性が。あそこを何とかクリアできるような評価方法というのはいないものか。これは別に単に多様化学校だけじゃなくて、通常の学校で現在不登校になっている生徒の評価方法も含めて何かいい方法はないのかというのが一番大きな課題ですけれども、とにかく北沢学園ではそういう新たな評価方法の確立というものをぜひ期待したいと思っています。よろしくお願いします。

○有馬政策経営部長　ありがとうございました。

続きまして、鈴木委員、お願いしてよろしいでしょうか。

○鈴木委員　保護者としては、やはり北沢学園、このような新しい学びということを非常に期待はしております。やはり学びの多様化学校の様々な取組というのは、子どもたちがこの先、一生を通じてよりよく生き、幸せになることが最終目的かなと考えております。いろいろと新しい学びについて私たちも模索をしているわけですが、新しい学びに必要なことというのは、やはり子どもが主体的になる余地をどうつくれるかということかなと私は考えております。もちろん、これは既存の学校のみならず、不登校特例校でも必要なことですので、ぜひそういう点も考えて取り入れていただけたらいいのかなと思っています。

特に、それに対してある一定の知識やスキルがあれば、大人が思っている以上に子どもというのは自分の力や知恵が発揮できると考えておりますので、ぜひ新しい学校では質のいいヒントを与えること、挑戦する状況をつくる、子ども自身に任せる勇気、そのような知識よりも知恵が身につくような場、そういうところも取り入れていただければと考えております。

それから、私も鎌倉のほうに一緒にお伺いして視察をしてきたんですけれども、やはり鎌倉という立地条件、お寺があったり、海もあり、山もあり、いろいろな意味で世田谷とは多く違っていたんですけれども、世田谷にもいろいろな面で多種多様な立地があると思いますので、ぜひそれを生かした新しい学びというものを考えていければと思っています。

○有馬政策経営部長　ありがとうございました。

では、続きまして、坂倉委員、お願いいたします。

○坂倉委員 北沢学園に期待することなんですが、学校の中の間や教育指導については、竹内課長以下、本当に志を持って設計されていらっしゃるの、こうじゃなきゃいけないとか、こうしたほうがいいんじゃないかは全くありません。むしろ今の理想を本当に実現できるように進めていただければなというふうに心から思っています。

さっき少し言いましたけれども、不登校の問題というのは非常に複合的な問題で、学校の問題だけじゃないと。社会的に不登校がこれほど大きな現象として広がっている、この先の未来をどういうふうに描こうかということで慶應義塾大学との共同研究を今やっている最中なんですけれども、いろんなところでいろんな立場の方の葛藤や取組やこの先の展望を聞いていく中で、学校の中の問題、学校を教育の問題として狭く捉えないということは非常に大事なんじゃないかなというふうに感じています。

例えば、慶應の医学部の研究だったりするので、小児科の先生方から見たらどういうふうに見えているのか。心療内科には行きますけれども、子どもの現状というのは心と体を切り離すことは決してできないんだ、だから心療内科だけではなくて、小児科が関わる必要があるんだとか、そうなってから一番本当に親御さんを含めて途方に暮れるのが、今何が起きているのかというのが分からないという不安の中で、では医療的に何ができるかということ、生育環境ですとか、これまでの様々な状況とかを全部ひっくり返して、今起きていることというのは何なのかというのを、本人のことなのか、御家族との関係の問題なのか、あるいは学校や地域社会との関係の問題なのかというのを当事者の方がとことん納得できるようなところから始めないと、次に何をしたいこうかという力が湧いてこないよねみたいな話をしていたりします。そうすると、単にこれは教育だけではなくて、医療との接続も必要になってくるでしょうし、一方、何となく行けなくなったときに学校に戻って社会に行くんだというルートをどうしても学校は描きがちですけれども、必ずしも学校を通らなきゃいけなかったんだろうとか、学校を通るにしても、どういう学校が実際に存在して、私は選べるんだろうかみたいな選択肢、そこには学校以外の選択肢というものもあるかもしれませんし、こういったことを当事者の方が、子どもたちがちゃんと分かるようにするという事とか、そういう問題なのである。だから、必ずしも先生だけ、スクールソーシャルワーカーの方だけじゃなくて、いろんな人がこの問題の当事者になり得るし、力を合わせていくことができるんだという社会的なコンセンサスみたいなものをもっと広げていかなければいけないし、それをやっていった先に、さっき澁澤先生がおっしゃっていたように、この不登校という現象を通じて私たちは未来の社会というのがだんだん

浮き上がってくるんじゃないか、ある意味期待を寄せているところもあります。

そういうふうにごるっと回ってきて北沢学園にぜひともお願いしたいのは、多様な選択肢、多様な学び方があります。学校の中では多様な学び方をしていまして、学校の中の話だけじゃなくて、北沢学園以外にもたくさんの学び方が存在するし、人生の選択肢もいっぱいあるんだよということをこの学園の設置を通じて、世田谷区あるいは世界、日本中の人たちにもっと伝えていくということも併せて期待したいなというふうに思っています。

北沢学園自体も、多様化学校とかいってもいろいろですね。鎌倉の在り方と北沢学園の在り方というのはやっぱりコンセプトが違うし、例えば調査で聞いたのは、ベネッセ高等学院の方に聞いたときに、ではベネッセがやろうとしていることというのは、オンラインでこういうことを提供して、こういう子たちにこういう場を提供したいんだということです。ですから、公立の学校だけでなく、民間の企業だったり、あるいは私立の学校だったり、あるいはフリースクールとか、居場所をつくっていらっしゃる本当に多様な人たちがいらっしゃる中で、子どもたちがどういう状態にあって、私はどこに心を引かれるのかとか、どこに行ったら私の次に行きたいところの可能性はあるんだろうかみたいなものとか、あるいはもしかしたら区内じゃなくて、地域みらい留学みたいな1回東京じゃないところに学びに行くんだみたいな多様な選択肢も含めて、しっかりとみんなが大人も含めて理解して子どもが選べるようになっていくきっかけになるとすごくいいなと思っています。

あと、選択肢と時間ですね。必ずしも何歳までに何をしなきゃいけないじゃなくて、そこはもっとゆとりを持っていろんな人生の作り方があるんだということを示したりとか、職業とか進路の選択肢も、どれにするということよりも、生き方の価値観の多様性だと思うんですね。こういうふうに頑張って、こういうふうに行ったところでこういうふうに活躍するんだということもあっていいし、自分なりに楽しく生きていくということを選択するのがすごく認められるとか、自分は表現がすごく得意だから、これでやっていけばいいんだというふうに心の底から思えたり、それでいいんだよと言ってくれる大人たちがいっぱいいたりみたいな形で、一番多様性がないのが実は大人の頭の中の教育観とか、キャリア観みたいな価値観かもしれないので、そういうのは本当にいろいろあるんだよみたいなことを、せっかく学校を設置するという大きなアクションを起こすわけですから、学校をつくって、その中で終わりというよりも、これもあるし、それ以外もあるんだよということを広く多くの人と分かち合えるようなきっかけになるといいなというふうに思っています。

○有馬政策経営部長 ありがとうございました。

教育委員の皆様から様々な御意見をいただきましたが、これらを受けて、教育長、いかがでしょうか。

○知久教育長 今、教育委員の皆さんから子どもたちにとってのたくさんの学びがあるよ、多様な選択肢がある。また、澁澤先生からは世田谷の不登校対策はある程度充足してきたんじゃないかというようなお話をいただきました。

北沢学園への思いを語る前に、世田谷の現在取り組んでいる不登校支援ですとか、また、多様化学校、なぜ今多様化学校なんだろうというのをちょっと踏まえて御説明をさせていただきたいと思います。

まず、全国状況ですが、文科省の調査によりますと、小中学校における全国の不登校児童生徒数は過去最多となっております。世田谷区においても、公表している令和4年度の不登校児童生徒数は1540人に上り、その後も高い水準で推移をしております。

こうした状況を踏まえまして、区では、不登校の子どもたちを支えるため、冒頭御説明をさせていただきましたが、学びの多様化学校ねいろ、学校内における別室登校であるほっとルームの整備、教育支援センターであるほっとスクールの運営、また、オンライン支援の導入など、子どもたちが安心して学べる環境づくりに力を入れているところです。こうした不登校の背景が多様化している今、特に様々な、こうした伏線的、複層的な支援が世田谷区において提供できているということは、子どもたちの安全・安心という視点からも非常に重要なのではないかと思います。

そんな中での今回の学びの多様化学校「北沢学園」の開設なんですが、不登校支援の一環としてまとめた不登校支援ガイドラインの中で、不登校の児童生徒の方を対象としたニーズ調査を行っています。澁澤委員からも学びたいという子、これは不登校の子が誰よりも強いというお話が出ていたんですけれども、この調査の中なんですが、不登校中の気持ちについて不登校児童生徒に複数回答可ということで尋ねたところ、中学生の50%がほっとした、楽な気持ちだった、こうした回答がある一方で、同じく中学生の50%が勉強の遅れに対する不安があると回答、39.5%が進路、進学に関する不安を抱いていたと、こんな結果が出ています。つまり、一時的な安心感の裏側に学習面や将来への強い不安が同時に存在している、こんなことがこちらのニーズ調査では分かっています。支援の方向性としては、安心できる場所に加えて、学びの保障の必要性が明確になったと。世田谷区では学びの多様化学校の役割はますます重要になってくるというふうに認識をしているわけで

す。

その上での北沢学園への思いですが、分教室型のねいろに続く本校型の北沢学園中学校、この新たな学びの場は、学校教育法第1条に基づく一条校ということで設置をしてまいります。そうしたことから、教職員体制をしっかりと整え、教室や特別教室、校庭や体育館といった教育の環境にも十分活用いただけるものと、子どもたちの学びの場として確かな機能を発揮できる存在になっていくのではないかと思います。

また、北沢学園では、総授業時間数を通常の1015時間から約2割減の840時間に設定する方向で今準備を進めています。これは、学校に長時間滞在することが難しい子どもたちや段階的に学校復帰を目指す子どもたちにとっては、より安心して通える環境づくりになるのではないかと考えています。また、授業時間の調整によって生まれる時間的な余裕を生かし、教育課程外の活動にも力を入れてまいります。

基本計画では、リ・ラーニングとして、自学自習の時間の確保、都立高校との連携、高校生との関わりを持つ時間の設定や、併設されるほっとスクールに通う子どもたちや他校の不登校児童生徒との交流なども予定をしております。こうしたことで子どもたちの個性や実態に応じた多様な学びの機会が提供され、子どもたちが自分らしく成長していく姿が見られるのではないかと大いに期待をしています。北沢学園中学校が子どもたちにとって安心できる居場所であると同時に、自らの学びを進める場として機能することを願っております。区としても、こうした新たな取組を地域の学校の学びにもつなげていくなど、不登校の子どもたち一人一人に寄り添いながら、全ての子どもたちが安心して学び続けられる環境の整備に尽くしていきたいと考えております。以上です。

○有馬政策経営部長 ありがとうございます。

この間、教育委員と教育長から様々な御意見と決意が出ましたけれども、区長のほうで何かありますか。

○保坂区長 今、教育長から教育委員会として北沢学園を準備していますよというお話があったんですけれども、私から見て、教育委員会が学校の学習内容だとか、教育課程だとか、これを決めて運営していく。区長部局というのは、教育環境の土台を整えていくという、その立場を踏まえて発言したいと思います。

1つは、やはり主体的で、また自立的、また探究的な学びというもの、あるいは自主独立の気風で一つの課題を徹底的にやり遂げていくようなことというのが必要だという話になってきています。学習指導要領も、これまでの全国一律一斉にということから、各自治

体の教育委員会や学校のそれこそ主体性を重んじる方向に来年は転換するというふうな話も聞いております。その中で世田谷区として力を入れている、この間、成立しました子どもの権利条例、つまり、子どもの日常、子どもに関わることについては、子ども自身の意見表明や成長、発達に応じた参加、参画ができるということを保障しているという内容ですが、この学校運営の中に生徒、子どもの自治、自分たちで決める、回す、そして失敗したら責任を取る、また、壊れたら修復する、そういうようなことをどれだけつくれるのか。今はいじめの問題とかはやっぱり潜在的にどこの学校でもすごくあって、その修復というのがすごく難しくなっているのです、子どもたちが主人公、その学校では自治がある、その自治は実は民主主義を培養するんだと思います。そういう意味で、自分たちが考えたこと、言ったこと、試行錯誤したことが学校に非常に生きたという実感を持って社会に入っているってほしいというふうに思います。

2番目に、これは一つの小学校の校舎なのでかなり大きな建物で、写真で見ていただいても分かったと思いますが、そういうこともあって、ほんとスクールは、やはり不登校の問題に悩んでいるお子さんを対象にしている、小学生から中学生を対象とした世田谷区に今3か所あるんですけれども、これが同じ校舎の中に、1階、2階にあるということなんです。そして、さらにそれだけではなくて、体育館のほうに行くと、きたっこという児童館の分室、児童館としての活動がそこで行われるということは、就学前の子どもたちから高校生、あるいは若者に至るまで出入りをすると。つまり、この3要素が混じって一つの施設を使いながら相互にどんな作用が生まれるのか、これはとても楽しみだし、そこにフェンスを張って出入りしないようにみたいなことは全く想定していないわけで、むしろ汽水域というか、ほんとスクールに行ってみたりしたいんだけど、取りあえずゆっくりして自分の居場所としていられればいいんだけど、こちらの北沢学園のほうでやっている放課後の活動というのはすごい面白そうだなというと一緒に混じって、知らないうちにやっている。また、児童館のほうは大がかりな工作物というんですか、おみこしを作ったり、そういうこともやりますし、キャンプなどの活動もしています。そういうところも全部組み込んで相互作用で補い合っていくと、これは日本にたった一つしかない。そういう特例校というのはないはずなんです。本校型プラスアルファがあるというところを生かしてほしいと。

3点目は、世田谷区には大変社会資源が多くて、私は特にいろんな壁に当たって悩んでいる子どもたち、若者たちには、アートですね。芸術文化の力というのはすごく大事な

と思っています。多摩美術大学にお話をし、何らかの形で演劇や絵や様々な表現の力というのと北沢学園の活動がクロスしていけないだろうかということをこれまで話してきました。また、割と近くに音楽専門学校があって、ここは本当に日本有数の機能を持っている、奥行きを持っているところなんですね。音楽というものを徹底的に極めようとしているような専門学校。そこも実は不登校の子どもたちが多く来ているところなんですけれども、そういう意味での世田谷区的な社会資源が北沢学園というところに特に放課後を中心にうまく入り込んで、また、それぞれの独自の教科の中にも助っ人として、あるいはコーディネーターとして入ってくれるような、そんなところを期待しています。

それと、今、学校の教員の方、運営者のところに注文がすごく多いんですね。やっぱりうまくやってくれとか、これはどうなっているんだと。そういう意味では、申し上げたいのは、やはり完璧なものは絶対スタートしないので、むしろ子どもたちが主役であるとともに、保護者の方もみんなで協力して新しい学びのスタイルをつくるというふうにぜひ持って行ってほしいなというふうに思いますし、また、障害のある子どもたち、発達に課題を抱えている子どもたちも非常に多いですね。ですから、世田谷区ではインクルーシブ教育のガイドラインをつくりましたが、そういう意味で包括的なインクルーシブな学びというものもぜひ示してほしいなというふうに思います。

ですから、あまり北沢学園にこれをやれ、あれもやってほしい、これも期待するばかり言い過ぎるとプレッシャーが大きくなり過ぎて、やる人が本当に限られてしまうということになってはいけないので、みんなでつくる、みんなで支えるということを目指にできたらなと思います。

○有馬政策経営部長 ありがとうございます。

ここで、会場から御質問があるのでお答えいただければと思います。

まず1つ目が、オンライン学習という方法が学習の仕方の一つとなっていく一方で、社会性を身につけるという観点から、特に学びの多様化学校での在り方についてはどうあるべきでしょうかということで、今までもお話の中でありましたが、改めてこれにお答えいただいてもよろしいですか。教育委員会ですね。

○竹内教育相談課長 先ほど世田谷区の不登校対策全体をお示しした表が森本指導主事の資料の中にありました。その中でせたがやY a h！オンラインという取組もやっております。そこでは、そこをきっかけにして学校に復帰するという事例なんかも出ていて、今二百数十名登録されていますけれども、有効な手法の一つというふうには考えております。

ただ、多様化学校におきましては、学校に通おうということではいろんな体験を経て入学されるんですけれども、そうした生徒の皆さんについては、できるだけ通っていただくということを基本にして、その中でどうしてもというときの補助的な手法としてオンラインを使うということは考えておりますけれども、この多様化学校、ねいろも含めてなんですが、そこにおいては、まずは通っていただくということを中心に考えて進めていくという予定でございます。以上です。

○有馬政策経営部長　ありがとうございました。

では、続いてもう一つ、中学校における学びの多様化学校は開校や拡充がされていますが、小学校についてはいかがでしょうかということで、先行事例がありましたらそれも併せて教えていただきたいということで、世田谷区における展開、構想はありますかという御質問がありますが、いかがですか。

○竹内教育相談課長　現状において、小学校の不登校の児童の数が大変増えてきているという実態はあります。前は中学で多くて、小学校は少なかったんですが、大体並んできているという状況でございます。ただ、問題と取り組むべき内容というのはちょっと差があるかなというところで、この多様化学校というところでは、私どもの中では居場所というところに加えて、教科、学んでいくということも重視して取り組んでいるところでございます。

今のところ、教育支援センター（ほっとスクール）は今度4か所になりますけれども、こちらが安心できる居場所としての機能を果たしていて、小学生の不登校の方も来ていただいているという中で、多様化学校のような学習、勉強するということを目指している施設が必要かどうかということは検討を要することかなというふうに考えているところでございます。小学校の段階で言うと、まずは安心をして、そういう社会性を身につける場に通えるという状況をつくっていくということを目指していいのではないかなというふうに考えているところでございます。

○有馬政策経営部長　ありがとうございました。

時間の都合上で取り上げられない質問がございましたので、そちらにつきましては、後日、区ホームページにてお答えをさせていただければと思います。

そろそろ時間が近づいてきたんですが、教育委員さんのほうで黒沢先生にぜひこれは聞いておきたいというのはありますか。

○中村委員　今の質問にも関連するんですけれども、黒沢先生、高尾山学園は小学部があ

りますよね。これはどんな感じでしょうか。

○黒沢氏 実態としては小4から受入れをしています。八王子市の方針として、小学校1年、2年、3年はもう少し頑張ろうよというのが基本方針なんですけれども、ただ、実態としては、ここ数年で低学年は急激に増えています。その子たちを高尾山学園に入れるのはやぶさかではないんですけれども、やはり社会性もさることながら、基本的な読み書きもままならない状態で自己選択というのは非常に難しいんですよ。だから、自己選択ができる年齢までは違う場所で、いよいよ学びも必要で、将来に向けて頑張りたいんだという気持ちの子を受け入れる、こんな方針で高尾山学園は小4から受入れをしています。

○中村委員 ありがとうございます。

○有馬政策経営部長 ほかに教育委員さんのほうでありますか。大丈夫ですか。

では、せっかくなので、先ほど講演の中で北沢学園中学校に期待することというお話をいただきましたが、改めて今までのお話を受けて、また黒沢先生から期待することをお話しただいてもよろしいですか。

○黒沢氏 まず、これは僕の持論なんですけれども、不登校の子が得をする社会はつくっちゃいけないなと思っているんです。普通の学校で普通に努力している子が報われるというのが第一で、そこに取り残されないようにしてあげるだけで不登校になることが逆に得になって、何かラッキーみたいにならないようにしてあげないといけないなというのがまず1つです。

それから、子どもたちは、潜在的には学校に行きたいとか、友達とわいわいがやがやしたいというのはみんな持っているので、環境をどう整えるかだと思うんですね。僕は、子どもは子どもの中で育つと思っていますし、どんな不登校の子でも適切な環境を整えてあげれば子どもらしい姿に変容するのをずっと見てきていますので、ぜひその潜在力を引き出すとか、潜在的に子どもたちの希望を実現してあげるようにしてあげたらいいかな。これは2つ目。

最後、そもそも不登校をなくさない。なくすのが一番なわけで、多様化学校に頼るだけではなくて、多様化学校からいろんな情報を発信しながら最終的に不登校そのものがなくなっていくようなことがいいのかなと思う。時間はかかると思うんですけれども、地域の学校が変わっていけば、いずれ不登校はなくなると思いますし、逆に学びの多様化学校がいろいろ実践していくことをできるだけ地域の学校に寄せていってもらおう。地域の学校もやっていることを少しずつ多様化学校に寄せていく。お互いが合流したところが新しい学

校の姿なのかなんていう気もしていますので、ぜひそのあたりも多様化学校をつくるというメリットを最大限に生かして、いろんな教育行政に反映させていただけるといいのかなと思っています。以上です。

○有馬政策経営部長 ありがとうございます。

教育長、最後にいかがですか。

○知久教育長 黒沢先生、いろいろな御助言をいただきましてありがとうございました。これから学校自体の仕組み、運営の仕方、学校経営ですとか、様々なものを決めていかなければなりませんので、また黒沢先生にも御助言等をいただきながら進めてまいりたいと思います。

何分2校目ということでありますけれども、学校全体を使っていくということで、教育委員会全体で取り組んでいく事業、また区長部局からも支援いただきながら進めていくことかと思っていますので、区を挙げた事業としてぜひ成功させたいと思いますので、区民の皆様の御支援と御理解をいただければと思います。以上です。

○有馬政策経営部長 ありがとうございます。

では、そろそろ時間になりましたので、最後、区長にまとめていただければと思います。

○保坂区長 長い間ありがとうございました。私の意見ですけれども、不登校がなくなるというよりは、不登校という言葉がなくなる社会というのがこれから目指したいところなのかなというふうに思います。学びの多様化学校「北沢学園」では、恐らくこれまでになかったSTEAM科なんかもありますし、キャリア・デザイン科、マイデザイン科という中でいろんな試みが行われるだろうと。その試みがいいものであれば世田谷区内の各中学校、あるいは場合によっては小学校にも広がっていく可能性もあると。ある意味で全ての学校が行きたくなる学校へ変容していくと。それぞれが変わるということが必要なんだろうと思います。

1 個気をつけないければいけないのは、やはり今、消費者と供給する人に明確に分かれてきているんですね。学校はもともと地域の共有の土地を村の人が総出で普請をして造って、だから運動会なんかは地域の人にみんな還元するというか、おかげさまでという気持ちでやられてきた。そのときには学校教育の消費者ではなくて、バックアップする人たちだったようにも思います。

アメリカのポートランドの学校と来年以降交流していこうとしているんですが、やはりガバナーというか、親の代表が学校運営を責任を持ってやっていく。お金がなければ親た

ちがつくということが当たり前になっているのに対して、やはり日本の社会の場合は、長年、それこそ学制発布以来、富国強兵で来ましたので、要するに国の方針でとにかく学校というものをつくり、教育を受けるというような割と縦の関係が強かったせいか、今特に消費社会が広がって、これをやってくれていないじゃないか、これはどうなんだという消費者としての強いクレームなり、ニーズなりということが結構学校の冒険とか積極性みたいなものを制約しているというか、狭めているという要素があると思うんですね。

北沢学園の説明会を聞いていて、保護者の皆さんからの声は、どうやって自分の子どもがねいろか北沢学園に入っていけるのかなということの期待と、どんな制度になっているのかということが主な質問点、それは当然の質問だと思うんですけども、やっぱりこの時代、新しいものをつくり出すのは教育委員会や学校の先生だけの力では到底できないと思います。そこにやはり保護者の方も一緒に責任も担って子どもたちの自治を大切にして、世田谷区の地域の人たちや社会資源も全部バックアップすると。応援団はちゃんとしっかりしているよということできれい出される教育というのは、いろんなピンチや予定どおりにいかないことが多いと思うので、そのことを乗り越えていく力になるのかなと思います。

もう一つ、総合教育会議は、法律に基づいて首長が教育委員の皆さんと公開で討論することになっていて、もう10年近くやってきていて、不登校の問題も何回も取り上げ、新しい学びでどうなのかという話も何回もやって、ようやくここまで来たということを実感いたしました。また引き続き、この総合教育会議は続けていきたいと思います。今日はありがとうございました。(拍手)

○有馬政策経営部長 ありがとうございました。皆様ありがとうございました。

それでは、時間になりましたので、進行を司会に戻したいと思います。

○司会 意見交換会ということでお送りいたしました。ありがとうございました。区長、教育委員会の皆様方、また、黒沢先生はじめ、ゲストの皆様、御登壇いただきまして誠にありがとうございました。とても有意義な意見交換ができたんじゃないかなというふうに思っております。

こちらの総合教育会議につきましては、後日、今、予定では9月中旬ぐらいでございますが、世田谷区の公式ユーチューブチャンネルで配信する予定でございますので、もし今日御来場の皆様、またZ o o mで御参加の皆様、もし見られなかった方に御紹介ということであれば、そういったユーチューブチャンネルでも配信しますので、ぜひ御案内いただければと思います。よろしく願いいたします。また、過去の回も配信してございますの

で、見逃した方がいらっしゃれば、そちらも併せて御覧いただければと思います。

本日は、こちらをもちまして令和7年度の第1回となります総合教育会議を終了とさせていただきます。皆様、御登壇いただきましてありがとうございました。また、御来場の皆様方、Z o o mを御覧いただきまして、最後までお付き合いいただきましてありがとうございました。長時間にわたりましてありがとうございます。これにて終了でございます。ありがとうございました。（拍手）

午後4時07分閉会